

筆頭にはぬる木葉や三上山  
しみくと子は肌へつくみぞれ哉  
みそ萩の種はこぼれて枯野哉

石の苔をあらひ、塔婆をたて、短  
袖に香華をさりて

曲り来る空や小春の旅日和  
孀なる蟹もあるらんさよ鴉  
泉や 曉 起の炭ふくべ  
さばしるや一枚障子冬牡丹  
蟬丸と 風 對の隣あり  
白波の疊むに遅し初木葉  
立舞や里へ鴉のはねつるべ  
山水に後れて得たり枯茸  
初霜や油をしごくむら雀  
棕ちるや城の稻荷の小豆飯

栢 十  
秋色 川

桃 隣  
友 雅  
凍 雲  
青 峨  
太 岱  
懷 山  
素 海  
雷 川  
由 之  
橋 叟

風やしらりと星の目を出す  
落葉見ん人もほつと切通  
鳥の尿まだかたまらぬ落葉哉  
炭釜や峯にとだえし雪の僧  
埋火も心もとなく待夜哉  
海越に田地をぬらすしぐれ哉  
つがもなき所へさすや冬日影  
北殿や落葉がうへを島づたひ  
きらと比良は月夜の時雨哉  
身は樂に時雨で通る野馬哉  
燕粥をさます堅田のあらし哉  
投た猫訴訟顔なる衾哉  
飯鐘にうつろひやすし比叡の霜  
水仙や氷る拳を庵まで  
口真似の荆也ける枯野哉

後 涓 泉  
竹 船  
石 泉  
香 山  
里 東  
野 徑  
潘 川  
微 房  
棧 香  
立 朝  
入 松  
向 漁  
里 扇  
皆 可

風に南がしらやうかぬ顔  
その人はもし渡唐もや初霽  
松風に自己のはだへを火燧哉

かれ尾花のあらまはしは門人をしの  
び侍り、

次郎兵衛は何あきなひを夷講  
禪堂を覗く音せぬ落葉哉

故翁きさがたに遠遊の年あり。潮  
海のはてしなきおもひを、晋子に  
かたり侍るさて、

象鴻や龍の尾わかる村霽  
そのうちや雪三尺は茶一服  
蓑虫の下に何着て時雨哉  
七尺やかたへしぐるゝ金柱  
新發意の後の父母也歸花

月 圃  
回 川  
是 橋

横 几  
千 琳

共 雫  
紫 蘼  
秋 航  
露 柏  
甫 盛

風よ吹のこされて檜笠  
橋守よ松はかれたか雪ぐもり

折 腰

冬借の五斗俵出たりませの菊  
一休の魂の事かおち葉舟  
霜も雪もけさの茶にしれ水車

しら露もこぼさぬ萩のうれり哉。  
さからびたる有ましを、ふさんし  
てたうびける、七させ先のいき顔  
を、見ぬ世の友におもひなして

畫心のしはめるさまや比巴の花  
しこる暮や何れ置手の霜柱  
水仙の若葉の夢や宇佐美管  
あけ火燧よこ折ふすやさよの山  
十月や紅葉をしはる鳥の音

素 林  
鈞 月

龜 毛  
予 象  
我 助

專 吟  
適 三  
酉 花  
一 雀  
擊 水



松の驚水のうへをうらみ哉  
けふばかり至樂をよむも時雨哉  
待人の陽やあつめて冬牡丹  
草も木もにらみ付たり冬の月  
常灯の待乳山からしぐれ哉

虎 琴  
指 馬  
千 調  
玉 陽  
每 閑

杜若ありや研屋の冬がまへ  
燒味噲は鳥の空音の霜夜哉  
凧や榮螺吹込板ひさし  
初雪や鱈に盛て二子山  
霜時雨それも昔や坐興庵

荒 月  
大 町  
東 翠  
檀 泉  
嵐 雪

懷舊七 後序

境中人。每爲物所轉。而不能自立焉。夏見紅衣。則覺熱。冬見碧衣。則覺寒。流注顛倒。全墮五里霧中。矣。境外人。如泥之珠。如砂之金。入垢穢地。而現清淨相。不必厭垢穢地。不必著清淨。卓然常遊于諸法之外也。在昔歐陽公煉文字。戲說三上功夫。揭厠上爲其二。顧文章者。呼吸宇宙清氣。而雪橋之馬。風聽之床。固其所也。安得羈穢土之厠。以助雅興哉。然其與道上枕上並稱。鼎立爲三奇者。豈非吾所謂入垢穢。現清淨之道耶。且夫人世滿前種種幻相。孰非垢穢。金壁如尾衣帶如械。宦門如阿鼻城。魚市肉山。如尸陀林。濃蛾靚粧。如革囊血。雖曰青山白水。究竟亦蟻蛭蹄淡耳。然則娑婆界中。是一大厠上也。吾人生於斯。老於斯。病死於斯。則舍之將安住乎。要在干得清淨心。以入遊戲三昧而已。復何區區問三上之清穢哉。芭蕉翁曾以厠言鳴。及晚雜染爲僧。芒鞋竹杖。率以羈旅爲宅。蓋其心悅嚮所謂境外人。而慕焉者也。一日與旅客會。如厠煉句。譚餘及此。當時以爲一場閑話。未知其味。東都晉子。出干其門。而青於藍者。翁沒七年于茲矣。庚辰冬十月十二日。值其忌辰。乃集同社六人。作懷舊七吟。因論先師厠上功夫。以冕其首。晉子帶妻兒。莞鹽米。使酒啖肉。每往來軟紅街中。其作新奇壯麗。不以先師枯澹爲範。蓋能得翁之心。而不踐翁之跡者。是又非世俗境中人也。否豈則能窺其玄。以論厠上之妙哉。噫。學此道者。苟不知其心。而同其跡。徒以厠爲腹稿一術。則其不與李亦遺臭者幾希矣。不知使紫始神聞斯言。則亦拊掌稱善哉乎否。

龜毛居士戲書于柳浪舍



類

柑

子

其角遺稿



類柑子文集上

あけほの

探幽が能筆その世に聞えければ、或時女院の御所へめし、曙の氣色を書て奉らしめよとあり。さればおもひがけざる風情を、いかに筆にはこらし侍るべきや、彼の野渡無人舟自横。ときこえし無聲の詩は、むなしき船に驚をのせて及第したり。亦一片の雲といふ畫の題に其心を得て、金殿のうへに白雪をたなびかせたりけんためし、いにしへの奇術なりとかや傳えたるに、我國人の名折なればと思合するに、後冷泉院天喜四年閏三月に、畫工の櫻を感じ玉ふて、新成櫻花の題を献らしめたりし例も、此曙の時にあへる手ぎはを、いかに書まさりせんとのみ、睡醒現夢の精神をこらして工夫せしかば、其妙をのづから筆頭にあらはれて、もとより丹青の彩りをからずおぼつかなくうす墨を引はえて、やがて院中にみそはし奉る。家の面目を法印にとどめたりし。其比花の本貞室が風情、あまねく都鄙にうつしもてはやし侍りければ、堂上の若公家、北面の武士、つらなる雜掌までも、すいたるどちはかしらつどへて當時の宗匠とし、とものみやつこいとまあれやといひふらしほのめかしける。いつとなく寂慮に聞えたてまつりしことありて、さすがに一躰を得たりと御感のあまりに、かの明ぼの、御かけものを下し給はりぬ。門人等此事をむべことぶける賀會の時、

明ぼのゝゑいりよかしこし春の山

貞室

亦ためしなきことにこそ。和漢其例をひとしくおもひなさるゝにや。こゝに曙の言葉をつどり侍る。

舍秀亭花中吟 五句

冠里

無花風 ひかぬ時 鍛はきれて 山ざくら  
未開花 ひまの 駒十日 手前を 櫻買  
満花 太<sub>ト</sub> 歴の 鳥も 曇れ 花の時  
落花 はゝ木ゝの 蟻とはにくし 櫻塚

山中閑寂人跡稀ナリ。

音羽から音あるものや花の蒂ヒタ

王維畫山水之賦、遠人无<sub>レ</sub>目、亦曰、丈山尺樹、寸馬豆人とあるを雨中の花、

此雨に花見ぬ人や家の豆

晋子  
三嘯

山庄 高き樹は雲に畫をかく霞かな

貝にてかいたむき侍るを

あさり貝むかしの 劔うらさびぬ

蝸むきや我には 見えぬ水鏡

類柑文集



藤 濁や鹽瀬によするふくさ貝  
鐵槌にわれから羸螺ニシのからみ哉  
子安貝二見のうらを産湯かな  
へたなりやかつぎあげしは水の粟

無腸公子

芦の穂や蟹をやとひて折もせん  
あな寒し隠家いそげ霜のかに

右手左手の興を得て

浮舟のすゞしき中へかにの甲

海島曲浦長汀の吟

あつみ山吹浦かけて夕づみ  
汐ごしや鶴脛ぬれて海涼し  
あら海や佐渡によこたふ天川  
早稲の香や分入道はありそ海

翁

明石のさまり

蛸壺やはかなき夢を夏の月  
此さかひはひわたるほごいへば  
かたつぶり角ふり分よ須磨明石  
五月十日雷雨ス。永代島の小家にやどりて、晴間を待に、  
明石より神鳴はれて鮓の蓋

晋子

ちからくさ

故翁のおくのほそ道、見侍るに

尾花澤にて清風を尋ぬ。かれは富るものから志いやしからず。都にも折々通ひてさすがに旅の情をもしりたれば、長途のいたはりさまざまもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也 翁

舉白集こはじめて吾妻にいきける道の記。

五日、小田原といふ所の宿に泊る。明れば玉だれの小瓶に酒すこし入て、糝めくもの御前にとてさしいづ。あ  
るじの男にやあらん。けふはめでたきせちにゆ。一盃けしめされゆへかすと、あいたちなくいふも顔まほられ  
ぬべし。しどけなき事うち語りて、今しばしねまり申べいを、それがしが且那のえらまからんとて立ぬる。か



れがふるまひにつけて、下略  
道の記の一跡。民語漸くかはるなどいへるにつけて、とみに東國のだみたる詞を一句にして、風流を發フツされたるこそよき力艸成べけれ。箱根山にて、

山路来て何やらゆかしすみれ艸

同記に、匡房のぬし、はこね山薄紫のつぼすみれとよまれしは、二入みしほといはんれう也とばかり知て侍りしを、すべてこゝもとにある皆かの色なるはおかし。昔の人はかう萬にいたらぬくまなかりしか。

是、其力艸也、深う思ひとるべき事也。

同記に、淺草のくはんをんとて、國ゆすりてもてなす佛おはす。口にまかせて、

いかなれや野べにかりかふあさくさのくはんをむまのはみのこしつる

土堤の馬くはんを無下に菜摘哉

晋子

そのころ今の吉原はなくて彼記にももれたり。朝づまわたり江口など、よせたる古きすさみどもよそならず。萬葉しふは朱雀の柳とあり。飛こえの柳といふなる所から、あみ笠かりて傳ひゆけば、

たひらこは西の禿に習ひけり

晋子

これらも力艸よりほりあてたる也。亦

心とめふみし人のなき玉やあもへばあかぬしみと成けん

紙魚と成それが灯笼の置字哉

冠里

十三夜

紙籬のうすき姿に砧月

同

南樓月下に寒き衣をうつとよせて、野分の巻、ひなのとは、いかどおはすらんととひ玉へば、人々笑ひてとあるに、その夜をきぬた月とこそ。

### 瓜の一花

河野松波老人宗對州公茶道也 一物三用の器をもてあそべり。則、長嘯翁のめで玉へる記あり。時鳥まだ聞はえする比、

かの鉢たゞき所望して見んと、芭蕉翁、高山何がし、言水等これかれ訪らひ侍りけるに、もとよりして風月の窓灯、雨の扉に修竹わかやかに茂りて、老をやしなふあらし成に、折から風爐の蟹眼にわきたつ程也とて、半日のあしらひいと興あり。床のうちに無絃の琵琶を居て、ふるき長瓢のわれたるに、花零フチより雫しず々と落て、誰となく後をおびやかしたるしめり、やるかたなし。主の涼を味はふる心にくさをうかどひ居たるに、瓜の花をもて此瓢にいけられたり。花よりもれ蔓より露をむすべるに、水はたあふれて扇を忘る。廬岳の雨を聞心地したり。撥面のうるほへる風情をいはど、戸難瀬の瀧に尾を曳けん龜のけしきしたり。水聲玉ちるばかり此一花に夏を流



して、老人の若話忘れがたし。月よくさし入、時鳥まぢかう飛ちがふほどの窓ならば、花をせぬを本意とす也。今は郭公すがりてあるに、久しう取出ぬふくべのけしからずもりて、閑席を犯すまゝに花はいけたりとて、一句づゝのぞまれ侍り。これらの風興今は二昔になん。

瓜の花 雫いかなる 忘れ艸 翁

花瓜や 絃をかしたる 琵琶の上 言水

此花に 誰あやまつて 瓜持参 晋子

幻住庵にこもれるころ

夕べにも 朝にも つかず 瓜の花 翁

はじめてめされたる御かたにて

見ぬかたの 御園の 瓜の汗 ふかん 秋色

下鳥羽桂川にあそべる時

瓜守やか かつらの 籟たえし 晋子

糺の靈泉にひたりて

岩飛や 味なさうなる 瓜一つ 堤亭

瓜の皮 水も 蜘蛛手に 流れけり 晋子

順禮は 瓜につくなり 一夜ぶし 大町  
牧方や 瓜といふ 聲玉くしげ 推車  
西瓜は蠻國の種にして、中華に賞翫うすかりしかど、卅年來のはやりものにして、今は和歌所へも、めしあげらるべかりしを、女房達のきはせらるゝかたもあるにや、題には出され侍らず。

ゆめひらき

西行法師、よの中のわづらはしきに心とどめず。折にあひたる名高き人々をよそになして、筑紫のかた修行し玉ひけり。かの山家集、せんす抄に委し。それにはもれて泪の雫と名付たる定家卿の筆事有。六十の末に明靜居士と成たまひ、みやこの亂をさけて、住吉のほとりに御休所をとどめ、須磨、明石の月に寢覺およぼし給ひけんよすがならし。其比、西行のたびのやとり、長門國とよら明神の社司、加田の重貞といへるものに、あはれまれおはしけるが、此比、ふと陸奥に下り玉ひぬと聞え侍りしが、行衛しられざりしを、重貞、おぼつかなく思ひくらせる長月のあかつきの夢に、住吉の御神枕上にたゝせたひて、

しる人にわかれしよりは松かぜもはらずなりぬ庭の月影

重貞、此神詠に恐れ奉りて、とく墨吉に諧て、明靜居士に法樂の和歌をすゝめ申けるに、西行の心ざしにかはりて、十首和歌奉納、奉幣のこと葉をそへ給へるもの也けり。是末の代に連誦ともに夢想開の會を興行せらるゝの



例とにや。

北の窓

わが栖ム北隣に、芦荻しげくおひて、笹阿<sup>ササ</sup>めなる地あり。茅場町といふ名にふれて、昔は海邊なりしを、今は榮行家作りして、山王權現の御旅所とさだめ、薬師ぼとけたち玉ふに、堂のかみばかり、たゞほのかに繪にかけると見ゆ。空地は水をためて池めかし、深草行人しなれば、蓼の花穂に立のび、なもみ、箒木色づきわたる雨風につけても、虫の聲聞まさり、大かたの空もうつゝなるに、待にかならず出る月哉と、ことはりし窓ふたかたに明めり。北にうたゝ寝して炎夏わづらはしからず。竹の簀子に這出て、螢をかぞふるもはしたなし。娘の四ツばかりなるあぶなく、ふとはしりてとらんとす。あやまちすべし。さはをりぬものよ。手とりてなど母ぞすかすめり。南の隅なる所に、灯の袋をかゝげて鵜舟と名づく。

石 灯 籠 蚊 屋 に き え 行 う ぶ ね 哉

显 子

垣根ゆひ廻したる古菰に、夕顔の花より見しが瓠にて、南風ふけば北になびき、西風吹ば東にとひとりごちつぶやきけん、男あらまほし。朝々の勤行すみやかに聞えて、鰯口打たゝく秋の聲目ざましき折から、歛負<sup>オチカ</sup>、拐<sup>カマ</sup>かつぎたる男等、四五人入來りて草刈つかねたり。隣づからのうつろひ、前裁かまへんとて溝堀はらふにや。例の八月十五夜には罌粟<sup>ケシ</sup>のたねまくわざなん。冬菜の畑うちならすにやあらんと見れば、尾花、鶏頭、菊、女郎花、所

せくまであるも堀捨たる。無下に風景を殺せり。家藏造るかとおもへばさも均<sup>な</sup>さず。あたらしき杭、古くぬせどもとりくまぜて、網代打たるやうにもものしけり。夕霧のたえまおもしろく、秋のけはひをかへてあらはれわたるなどいふ。

あじろへと契りし人のまだこぬはいづくによりて日をくらすらん

道因法師

日をくらしつゝ明れば、れいの男等、機車みつ輪もて來りて、くるぜのかたはらにしつらひけり。文七といふ者もとゆいこく所に成ぬる也。やうかはりて虫のねもたえ、小艸の花ものこらねば、あらゝしき野分の行衛雨はれて、邵生が瓜、諸葛が菜晶をむなしくすといへども、是の主のはからひなりければ、北殿にしはふくを鼻ひる迄にいひそしぬ。元結こく音、ひるは日ぐらしに聞まじへて、又ことさらの心地したり。山姥の廻り來ぬ所にこそ、五百機たつるにあらで、くるゝと巻とりたる車のたえまには、百舌の尾ふりの聲、したり顔なる蛇、蜂などの羽音にもかよひてけしからず。さらに松風の吹たゆめるしおりもあり。唐人鳳巾の雲に吼て、春色をもよほすひゞきも有。おのこらの形勢は農夫にことならず。破れぬなる笠蓮にかたぶけ、袖なき物きつゝ、わらんづはいて、淀の河瀬の舟引あゆみしたり。夜々はやすめて來ず。雨の日も來す。むなしき車のみあるぞ、與惣右が門に、たれを待やらとうたひ出らる。

時 鳥 ま つ や ら よ どの 水 ぐ る ま

宗 因

一日に十里の行かひはたやすかるべし。機たつる道いつしかほの白く、鵲の三筋わたせるやうにて、朝日にも猶



消やらず。花橘のかほらざりせばといひけん、雪にも降は、さて、小笹の色にかこちぬべし。もとひこく雫のたゝなはりて、さる風情には成ぬるなり。車にめぐる男ども、しばしも立休らふ事なく、夕湯に脊を晒し、砂石に足心をいたむといへども、心の苦しまざる所をうらやまれたり。上つがたの事いざしらねば、田家、山林、海邊の境談、ひとりをのれをはぐからずかたこと多し。淨瑠璃、説經の所々を覚えて語るもあり。辻讀の平家、太平記、籠耳ならず咄あへば、つとめて楽しむ場をもしれるにや。思ふ事なく世を忘れたらんものゝふるまひ也。玉といへる物、鞠ばかりの大さしたるを、千筋八重く引はえて、ひと夜寐すとて夜もすがら露にうたせて、朝くこきさらす。げに笹蟹のたくみにして、ゆきゝいくたびといふ數をしられず。車の前に光陰のうつりかはるを歎かずして、夕べをのぞむ事、猶人生のはかなきに、せめて東に流れ去とすんじぬ。其數三あるをや。法の車とも、

文七にふまるな庭のかたつぶり

角

元結のぬる間はかなし虫の聲

大絃はさらすもとひに落る雁

西北にならる塗垂の間に一株の柳あり。凡五とせにして、八九間そらに雨ふる枝をたれたるに雪折もなし。こゝに病後の筈うなづけともてなしたり。時につけつゝ、

蝸牛豆かとはばかり柳かな

同

正月つごもり雨ふる。

山吹も柳の糸の朶み哉

同

二月つごもり雨ふる。

春雨やひじき物には枯つゝじ

同

萩あそび

河東に楓子石原河南に曉松本所すめり。專吟、此西にあれば鼎のごとく交はれり。をのゝ萩をうつして紫白けぢめなし秋の情とこしなへに、月露の袂を前裁にさらして、一口茄子、つまみ菜のまふけごとしたり。楓子は手を盡さずをのがまかせに咲みだれて、露もたはゝに、盃のかはく時なし。かたしき寝たる花妻にこそ、長治、桃八と二人が手ひかれたりし酔ほの見ゆ。

ねたり込は誰の内儀ぞ萩に鹿

曉松は野亭ゆかしくかまへて、志シ晝にあり。詩酒、等閑の風情、池に敗荷を憐れみ、橋に睡鷺をやすんじたり萩の品そくくに輪とりして匂ひをこぼさず。猶、露霜のうつろふ色に心を盡して、あやなき夜半に灯火をもてなす。犬猫のしがらみかけて、こゝ宮城野とさかえたり。本あらの里外ならず。わきも子が袖の妻すり、うらみ顔なるに、



獅子伶の胸分にすな庭のはぎ

晋子

小島のすさみにかゝせ玉へるは、もとあらは、春刈のこしたる去年の古枝に咲たるにはあらず。本あらの櫻も此里也。

専吟は閑庭の笹垣、野分のまゝに無掃なるもゆかし。ほさで、みやこの人に見せばやと聞えし小萩にしほる衣手を、てづから洗濁ものして柏木にうちかけ、また、鈴、獨鈷のひゞき、虫のねにふり添たるも、侘人のこつてう也けり。畠の玄白をきりつくし、園の妙丹の霜に色づくを待も世をそむけたる亭坊にこそ。

萩 薄んすび分ばや 井井 莽 晋子

庵主、此文章にめで、玄白、妙丹ともに似合しき戒名なり。わが父母に名つけてといへりし顔氣時にあへり。

河東の萩遊び

秋萩のこれに鳴らんけいこ笛	曉松
萩深しとうふとよぶは卒都の濱	楓子
白萩や水涌あがるいざら井に	専吟
萩に來て筑麻の人か五本松	秋色
波着ちるや水に這子の玉櫛	琴風
箱戸樋や千枝にわかるゝ萩の花	志賀

大名を泣せて見ばや萩の供	寒玉
はぎが花立よる袖やおぼる染	日壽

自畫讚

白露もこぼさぬ萩のうねり哉	翁航
百里野の萩よりうれし櫃 <small>へ</small> のうへ	秋航
出し袖にたれかこぼれて眞萩原	宣藤
亂そふ萩の車や茶碗書	大町

東北、日光海道は、やせたる菊ばかり所々に、垣根まばらなる畠のへり咲みだれて、これより宮城野までのすさみもなきに、年に四たびの御行輿を拜み奉ること、つたなき詞にははゞかりあり。前駈びどしく笠持二人、中童子は乗かけにめされたる六人、左右の御副侍かぞへも盡さず。次に上童子四人、馬上に曲籥したり。後師四人の坊官、長刀持せらる。御道の行列に對してはあまり見苦しき人足ども、仕丁にまじはり、馬峯りけあげ走りめぐるぞうたて、なまめきたてるはなきゝやう、りんとうなどあらば、鞍のうへにまいらせたくや。

萩もがな菩薩にて見し上わらは	辨外
花にさは野越の萩のあらび馬	竹意
能因の襟ほどくやしほれ萩	



馬工郎は一字引ぬやはぎの道  
 むら萩に女むすびは誰がもとひ  
 萩の賤から辨當にひるねかな  
 萩くふて尾花芦毛のいさみ哉

角 吁  
 昌 貢  
 常 役  
 入 松

いなつかの灯

刈田にならぶ賤が庵の、膝を容るにやすげなるを、科頭箕踞長松下、とうちうめかる。そのかたちひとり書をよんでねんじいたる時、蓋うちかぶせたるものにこそ、三行の窓もるひかりいとあかうもあらず。遠う流るゝやうにうつろへば、むすび鬩斗などのさきにて、さばけたるやうに、洞口の虹の山の端にちりたる心地して、眼裏ほがらかに氣を伸しむ。一星の烟をはこぶ穴目より、北斗をさそふ影をもらして、閨中の銀河とこしなへに明らか也。是かならず貧閑幽居の大型にして、身にしたがへる物也。かれに肩おちせぬ物三あり。黒樂のかけたる茶じみてまだら也。玄黄自然なりければ我馬とよぶ。水籠に藤の手さしたる炭とり世にもあれど、とりあへず日高川と名付てもてなしたり。水かへつて火にそふうつはものぞかし。まろびかへりたる形は、彼落たる鐘に似たるもおかし。破魔弓の矢筒ところはげたるを火吹とし、晝けるまゝの名を松鶴とよぶ。これかれ取揃へぬ具とも、衾上の塵、枕の垢つけるかたはらにまじへて亂したれば、夜いたく更ぬるにつけてものすごきに、百鬼夜行のそれ

くゝに名乗出る心地して獨笑す。金銀の氣をむさぼるにたえて、つくゝとまたゝきしうちまもれば、油ねぶる狐、軒端を飛こえ、飯を盗む猫、戸棚を明て、たがひに目と目を見合たるに、雪踏引犬、入來れば力なくかへる尾ざしまでも、かゝはゆく心をまれて、麋鹿の友を愛せるに聊かはらず。鼠のよめりごとおどろくしう人に似たり。憎かりし蚊さへ老ぬるよ、さす力なきに、蚤こそばゆく、蓋をとつて光をませば、ありつる化物ども四方へちつて、かろろぎの聲ひとり悄然たり。深夜をなぐさむる數々かぞへもつくされず。砧、かりがね、千鳥、松風、舟のほうくゝと押來る聲、納屋の魚よぶ曉までに紅閨の私語、白屋のひとりねに對して、楓橋のおもひをのべ、萩浦のかなしみをそふるなかだち也。

清夜の吟をあつむるに秋興八アリ。

名月や御堂の鼓かねてきく

晋子

水汲のあかつき起やすまふ觸

中の間にねぬ子幾人小夜ぎぬた

人音や月見とあかす伏見艸

酒かいに行か雨夜の鴈ひとつ

蝙蝠や柱をねぢたる一時雨

滋樂城の火洞にあらば霜の聲



子子等には猫もかまはず夜寒哉

夜もすがらおもふことのうつしは、夢になりて、さめて盗汗をさますには金爐、満堂のたきものものぞみたえたり。安慰して此油煙にふすぼりかへる顔色、さながら松陰にうづくまるひじりの影に似たり。心も心戒に似よかしと、形影罔兩のあらそひに咽をかはかし、水瓶をたづねて、碩鼠の腹ふくれたる事をつゞりぬ。

其引

念に見よすびつの下は天のはら

景 帚

雪灯の紙あたらしや郭公

其 尾

二の膳のそれを心やまはり炭

其 裔

寝所へ訴訟て行や雪の梅

檀 泉

口切に堺の庭ぞなつかしき

翁 子

口切やはかまのひだに線蘿蔔

晋 子

貴賓をまねかる、御約束、三年の鳴りさかや。其鳴り世上に

かくれもなし。韓退之いまだ此鳴をきかず。

爐開や汝をよぶは金の事

晋 子

頭巾までふくさばきに挟みけり

其 幄

松の塵

文月十三日、上行寺の墓にまふで、かへるさに、いさらごの坂をくだり、泉岳寺の門をさしのぞかれたるに、名高き人々の新盆にあへるとおもふより、子葉、春帆、竹平等が佛、まのあたり來りむかへるやうに覺えて、そゝるに心頭にかゝれば、花水とりてとおもへど、墓所參詣をゆるさず。草の丈ヶおひかくして、かすくならびたるも、それとだに見えねば、心にこめたる事を手向草になして、亡魂、聖靈、ゆるしき修羅道のくるしみを、忘れよとたはぶれ侍り。

凡人間のあだなることを觀すれば、我々が腹の中に屎と慾との外の物なし。五輪五躰は人の體、何にへだてのあるべきや、と、彼傀儡にうたひけん。公卿、大夫、士庶人、土民、百姓、工商、乃至三界萬靈等、この屎慾をおほはんとて、冠を正し、太刀はき、上、下を着て馬にめす。法衣、法服の其品まち／＼也といへども生前の蝸名蠅利なり。

たらちねに借錢乞はなかりけり

人間生路のいとなみ、一朝一夕を食する事とはり也。いきてなき人何のこたへかあるべき。それに一口の棚經よんで、家々をありくは何事やらんとあやし。是かのなき玉のために奏者、取次とおもへば、墓をならぶる面／＼其名暗からず、地獄にても馳走せらるべしとこそ。



かへらすにかのなき玉の夕べかな

晋子

徹書記が生きてかへりしよりも、死をいさぎよくせし兵、ふるさとに思ひのこと事露なかるべし。

亡父東順、七十二の影をうつして讃を乞待りしに、其像露たがはざるを、

繪に書つ木にきざみたる佛見よをのがすがたにいづれかはれる

慶運法師、骸骨のゑのさんに、

生死をはなれんとおもふ心は何者ぞ。たゞ心の源をかへり見るべし。もし明らむることを得ば、曠劫の無明  
たちまちに消滅し、本来の面目すなはち現前せんとかいて、

かへり見よをのが心は何ものぞ色を見聲を聞につけても

予、此畫讚摸寫せんとおもふに、名工の心を盡せるものから筆に及ばずして、いさゝか案するに、童の時の遊戯  
をおもひ出られて、松の葉して人を作り、松の葉の弓、同じ鎗、長刀のそれぞと見ゆるをとりもたせて、左右に  
わけ、息をふきかけて争はするに、人間の動靜、起臥をのづからにして勝負決然たり。これは無心の松葉ながら  
人の息してはたからすれば、有心有情のものと見るに、折ふし庭の松風吹落て、松のはの兵さんくゝに打たふれ  
て、忽に風前の塵となるを浦風也けり、高松の朝あらしとぞうたひ侍る。  
亦この比憎むといへる一字題を得て、彼歐陽公のことばを逐。

蠅の子の兄に舜なきにくさ哉

晋子

父かたくなに母ひすかしとかや。兄に玉虫のひかりも哉、松虫、鈴虫の聲もあましかば、百餘帖の虫づくしに  
ものせられぬべしとたはぶれたり。

寺前述懐

馬老ぬ灯籠使の道しるべ 同

ながらふる人冬の蠅と見しが、日ぐらしの夕べにあさましきたどり也。

猿引

由良八郎左衛門正春といへる人、歌、連誹にほゝゑまるゝや。生涯の癖とし身にそふ病とし給ふに、世の人深く  
おもひしみて侍りけり。亡父東順、師としてむつまじりしかりけり。寛文中九十の賀せずして身まかり給ひぬと  
かや。氏性浮田家の外戚といへ傳へたり。住所はもとよりとどろける藁屋にて、軒は薬うる家にむかへり。門は  
鮑魚のいきたるに、鼻をおほふあたりにして、下司女などもなく、手みづから炊ぎうちくらひて、いとけうか  
る交りなりしかど、朝市と雲山とをあらそはずして、心ざしの高きをしたふもの多かり。或時吉川維足、此師こ  
ゝにありと聞てとむらひ來り、わが身よるかたも定り侍らねば、常うとかりし事どもを悔て、全く弟の道を忘れ  
申すにはあらずとやまひけるに、うちゑみながら、幸を得ルに人われ純熟あり。神佛すら衆生縁をもてすと恨  
みをのこし玉はず。今も歌は好れ侍るやと尋られ侍りしに、此ごろ世に張事のいひて、日本橋をわたりいに、猿



曳の人にまとはれて、むつかしげなるを見侍りしに、

かしこさのをのが心につながれてうきをましろのねのみぞなく

とたん申て過ゆ也といへるに、正春にがめる顔にて、かしらいたや、賢き人のいかで世の中につながれてうきめ見んや。癡猿把月とこそたとへたり。人は己れが愚につながれ侍るものぞとあさんかれしに、維足一言なく顔に汗して耻入覺えたり。いかゞ御なをしをかうむらんといふに、

愚さのをのがこゝろにつながれて

といひたらは歌なるべし。猿智慧、猿かしこしなどいふは俗言也とて、

いろはをもかゝぬや我と山の猿 正春

此當座は歌の了簡にも似ず、口惜き姿也。さしも風變の新古はわかれずや。誹諧はことさら一句一躰のものにこそ。

元日や狙にきせたる狙の面 翁里

七猿の仲間に踊る師走かな 冠里

意の馬、心の猿、ともにさはがしき事也。

母猿を階子にしてや岑の花 大町

身の代を狙にとらるゝ櫻哉 一雀

百灯に猿もぬかづく木葉哉 竹意  
いがみつくやたけ心や厩の猿 午寂  
元日や夫婦の中に猿の膝 百里

たはぶれに夏冬をわかつ

物着せてさるのすねたる暑哉 朝叟  
後むく猿のあやまるさむさ哉 序令

僧寒しさいふ題にて

木食の江湖也けり木葉猿 寸楚

朝々に三盃、暮に四盃とさだめしに、夜分は其數を破りて、心のまゝにくるへる猿あり。郊外に踊り、橋上をわたる。猿町の里はなれなる庚申塚に休みて、斷腸の吟、雪の中にこゝへたり。

其句五、

欄干や柳の曲をつたふ猿 晋子

蝶飛や狙をよび込原屋敷

猿の寄る酒屋きはめて櫻哉

かなしとや見猿のためにまんじゆさけ



腸を鹽にさけぶや雪の猿

哀猿の聲さえたてぬ成けり。昔、四谷の宿次に獵人の市をたて、猪、かのし、羚羊、狐、貉、兎のたぐひをとりさがして、商へる中に猿を鹽漬にて、いくつも引上て、そのさま魚鳥あつかへるやう也。李徳逢が申陽洞に入て都をかたむけ、猿どもを殺したる物語は、繪そらごとに見侍りし。かくあさましき形成べしとはしらざりけり。羊をもて牛にかへんこのことはりもさること。

## 歌の鳥並戀の丸

觀世小縷よりして、いかにも文字をむすぶ盲人あり。もとより字形を手練して、日月、山川、雨風、艸木、たてよこの點畫たがふ事なく、竹は竹、鳥は鳥、馬は馬と見ゆる蒼韻のむねをわきまへ、その物とさとししらせたる玉しゐは、目明らか成人の書畫の筆術にもまされり。そのかみ大師、高野の山を切ひらかせ給ひて、堂塔、院々を建給ふに、此道のたくみ等文字をしらす。印合すべきことはりもなしとて、いろはの四十八字を教へ給ひしより、末代の人の助けにもなれり。予その六八の字員を案るに、八卦六合にわたりて、三才の形容此かな文字にもることなし。盲人そのかたちをむすぶいへども、鴉鷺の黒白をたゞさず。梅花雪鶴のうらみあるをや。一心の寄附する所、口にいふを句なりとしらば、よまず書すの神代をあふぎ奉るべき事なり。あなにえやとの詞は、いかにして歌なりとは教へ給ひけん。我國風俗を習ひ得たらば、むすべる文字の心も、をのづからほどけぬべしと

いふよりして、誹番匠、いつを昔と名付たる編集、北村湖春にこと葉をそへさせ、句の首中を分て、付習はせ侍りしも、今は二昔の事也けり。近來の冠付は教へかた、先褒美の盞よりも起りて、專、人の本心をくるはせ、放財ものにしたたり。泯江はじめは觴をうかめしに、後は汚濁の腐才に流て、舟につむほどの諸道具、椀、家具、絹布、夜着、ふとんのたぐひ、源氏ものがたりの箱入、春曙抄、つれづれの諸抄、すべて人のほしげなるものを書あらはし一番、二番、三、四、十番まで、それづれの句主に配分せしほどに、福引の水をのまぬものぞとかるしう心得て、十才の男女、丁兒、小僧まで、他につけてもらひながら、物をとらぬやからは下手也とのしり、よききぬ得たれば、此點者よくものしれる也とほめわたる。端々、町々、手寄よき所に看板をかけならべ、夜に灯を挑て群集したり。風雅の狐狸なれば、弦をのがれて産業となる事、和光同塵のことはり、魔佛一如の見ゆるし成べし。しかれども古代に思ひしのばる、佛もあり、今川の了俊源貞世いつく島まふでの記に、

輓の浦つゞく海邊に歌の島といふ所あり。むかし此所を領しける人、和歌の道にすける心ふかきあまりに、おりたつ田子、いりぬる海士までも、歌をよませて興しけるより、やがて此所を歌の島といふ。歌の島のこなたに戀の丸といふ里一村侍る。いかなる人の物思ふとて名のりにし侍りつらんと、いとおかしく侍り。

夢とてもいもやは見ゆるたび衣ひもだにとかぬこひのまろねを

長者よりくたるならはしごとなりければ、歌の島、戀の丸の名たゞるにつけても、世の人のやさしき道に心あらば、誹諧の津と申すべくや。いたづらに邪慾の道に引入る事、神佛の御しめしを汚すわざ也けり。つらづ、彼天



狗どもの飛行するやうを見待るに、いつくの杉の上にすむともしられずして。蝙蝠の出るころに、必しも行ちがへり。その中の大團羽を以て、座したる首領とかや。最上源三と一二の賽をあらそへる者也。をのが住山く雪なれば、十月の比より師走をへて、二月のすゑまでは民家にまじはり、人間の胸裏を亂漫し、正法觀念の席を妨げ、一万三千の句形を招くといへども、白雲に花のうつろへば、あらしともちりうせたり。

里居の辨

やぶいりを春のものとしてや。上下の人の心そとろに成て、二たび盆後の悦びを待むかへたり。或古宗匠の判談に、

やぶ入、植物に二句去、養父人、人倫也

入の字は字去と沙汰せり。これらは文字の上を信用して其理くらし。たとへば家々の奴婢、童僕、丁兒等まで、年に一度の暇をもゆるさず。家風に例つて、かたくつゝしみつとめ侍る事は、宗盛卿のゆやに御いとまを給はらぬを手本とすべし。今の代は人の品ことの掬も改りて、春と秋二たび父母、はらから、うから、やから、類縁にめであひ、花月艷容の氣伸をし、命の洗濁などことぶきあふ事、ちまたにうたふ時にして、諸家その禁門をゆるめ、里へ下るをやぶりとはいへるなり。

女御ヲによろご。寝ネルヲねいる。破り、やぶいりと心得べし。例しれるおもと人、三日、五日など、日數

を定めて、いとま申出るなれば、御やぶり、おゆるしなどいへるもしとけなし。雲上の詞はあまれるもよし。たらぬもめでたし。下司の詞は、かならず文字あまりしたりとこそ。

季吟老人の雑談に、職人畫哥會に、白粉、しろいものうりと有、御の字をそへ、物の字を下略しておしろいなり。

遠里、小野、をりの、うりうの

雲林院、うぢの、不動堂、ふんど

郷談などにいひかけたる句は、おかしき筋なりとて、

今は お里へおりう野の露

季吟

里居の句引

子をぬるはやぶいりさせし摩耶夫人

冠里

いもうさにいひやる

やぶいりや見にくひ銀を父の爲

晋子

やぶいりや浅草かけて芝の海

琴風

小町こそあのやぶいりの肘袋

反梅

やぶいりに松の嵐や前うしろ

昌貢



やぶいりや今の御主は百官名  
藪入やわづかに見ゆる雪の艸  
やぶいりの破らぬ關の東哉  
やぶ入の辰ほしげ也魚の店  
紅梅や御はしたの名も四阿と  
やぶ入りや入相の鐘の聲ごとに

彼御經の海山にみちぬるを、一日一夜に演説し給ふは、佛

なればこそ

やぶいりやつもる思ひを涅槃經  
やぶいりに梅さかり也めつた町  
初花や五菜男のより來つゝ  
彼岸會に里へ下ばや杖と足  
やぶいりや島の拾を朱買臣  
やぶいりや梅あるかたは西の臺  
引幕ややぶいりわたる天川

山日午日山  
壽寂里枝  
大格百午日山  
町枝里枝

專白立百每宇焉  
吟櫻朝猿閑問子  
焉宇每百立白專  
子問閑猿朝櫻吟

藪入がやぶいりに道おしへけり

千夜を一夜

御所の香やつれて二夜は梅の宿  
乙女子のおぼろ月夜や二日隙  
やぶいりや御鬮がたりを夫婦連  
やぶいりに犬をつけたりしのぶ山  
やぶいりの勸状さがす袋かな  
葛城の片山仁兵衛里居かな  
やぶいりやおつとの心家徳利

辰之助が猫は焦尾琴のしらべに躍り、澤之亟が帽子は菊

宴の紫に匂ひて、二度のやぶいりをかざらすさいふ事なし。

尼寺やそらぬを木瓜の垣間より  
ほしあひや慶光院の徳に入  
秋色にむかししかたらん雨夜哉

每立其  
閑朝零

百之

同喩朴雪凍入堤  
言芝花雲松亭



此句は秋の雨夜にやど申たれば、春雨のふりくらしたる  
つれづれとこがや。

やぶいりのあやかしはたれ車引  
星合を中の七日の里ぬかな  
やぶいりの狭箱より西瓜哉  
野 功 悠 月  
野 徑

うらわかばには、藪入とかいて破字の辨まへもなく、正月ばかりの人のぞろめく事に思ひなしければ、一ツはあ  
たるうらや算など句作して、戀の心得たりしに、まつとしきかばかりこんと三日のひまを申かはしけれども、  
里の名残おしみなるに、一日の虚病をかまゆるも哀也。通ふ心の人もあらば、ことに偽ごともいと増からずと、  
御ゆるしもありけめ。

やぶいりやそれは因幡の是は星  
晋 子

千載集に一條院の御時、皇后宮に清少納言はじめて侍りける比、三月ばかりに二三日まかり出侍けるに、かの宮  
よりつかはされて侍りける。

皇后宮 定子

いかにして過にしかたをすぐしけんくらしわづらふきのふけふかな  
宰相の女房、わたくしにはけふしも、千とせの心ちするを曉だにとくとあり。御かへし

雲の上もくらしかねける春の日をとくからともながめつるかな

里居ながら内裏に侍る同意なりと、すかし申したる歌也。いづれの奥方にもあるべき事也。

ひなひく鳥

さちは姉、いもうとを三輪と名づく。あねめは日壽の尼、名の親に成て、おひさきの幸あれとことぶきものし給  
へり。三輪はことしふたつに成ぬ。あねよりは、物しづかにむまれつきたるをいみじとかしづく。穩母つれて出  
るごとに、小比丘尼のあと先うたひめで、道ゆきふりしたり。朝待かねる蚊屋のくもてに、窓もる光かくはゆ  
く、春のすゞめの雛をひく聲おかしう、埒おりたる矮鶏のつまよぶに、をのがそらねもなし。灯は有ながらしや  
うじほがらかにして、陽にむかへるわらはべの兆をふくめり。丸に尿やる聲さえねむたげ成に、外の邊にいそぐ  
啼聲しきりて、歩み出んとするけしきはか／＼しからず。きのふは十あしといひつゝ、六あし、七足ばかりはこ  
びぬといふに、けふは薬師御堂の石壇をりたち給ふ心にや。まふでくる人にも目かよひ給へりしなどいふにうち  
ゑまる。いつしか左のかた、稻荷の社なるみづがきにとりつき、立て手はなち、御手洗の水まさぐりて、袖ひぢ  
たれど神の御心はけがしたまはずや。あなかしこ、祈りものするけしきなりけり。

あゝ たつた 獨 たつた る ことし哉  
貞 徳

井上河州公の御吟に、



はへばたてたてば歩めと思ふにぞ我身につもる老をわする、

尼人のよはひめでたきにあやかれかし。此比は眞砂のうへにまみれながら、をのづから立ぬもどかしからで、千里の濱、八百日行道するべせんとて、あんよくと、はやしもていざなはれ行。社頭の梢、花あればううつといへり。月あればのとゆびさすに、猶、舌利なれかし。こゝにちい／＼ちや／＼うるものあり。色鳥に染たる餅を小串にさして、妖艶にふれそゝのかすを、ほしげにて手をさしのべたり。とればかいやりすつ。心のまゝにもてなせば、こてふの花にうつろひ、かげらふの水をわたるよりもやさし。家を出てあそぶ所、二町にたらずといへども、いき來るごとに、穩母がはかりごとをもてすかしありく。百里の行程に、海山をかけぬばかりの心なりかし。乳房くはへて寝てくるは鞍上の夢にや。駕籠のうちのうつゝにや。老幼のさかひをわきまへずして、浪の立居も眞如たがはず。

閑居の子共 松風にねる 晋子  
眞はねてゐて縁子の月 冠里

あした夕べに心得たる寝顔、つく／＼とうちまもれば、ほゝわらふ時あり。うぶすなのすかしたまふ也と。凡ソ煩惱のきすなとはおもへど、田舎世界のゑびす等、あまの子の賤しきまでも寶とめでたり。舐牛、白猿のなさせ夜の鶴、梁のつばめ、燒野の雉のひなまでも、つばさの床をはなれぬにこそ、人とむまれぬればそれほどの小ざうり、糸わらぢ、綾にさしたる足袋もあり。しころ頭巾のおかしげなるに涎をつゝみものし、雨ふらねども傘さ

し、座敷にて下履はき習ふ。何れ心に任せざらん。よろづ人生の化育をしれり。月と日は過客、天地は逆旅也といへる詞にすがりて、子等のどちくるふを見つゝ、酔て二ツ子の道艸をつどりぬ。機にあへる時みさかなに何よけん、手うち／＼あはゝ。

二ツ子をうしろへ引や大團羽  
廣蓋を車大路やあかり雛  
花ざかり藁を出す也老萊子  
乳のみ子に意味を付てや十三夜  
子の尿や柳力にわらひがほ  
初雪や心もしらず肩ぐるま  
あたらしう子を思はゞや花の春  
ゆび揃ふ迄を木芽やうなる髪  
鳳巾の尾やえのころかつく表馬場  
柿木にあそぶ子共や蟹と猿  
釣臺にのる子いづこへとしの昏  
初午やあたりの乳母は夕月夜  
大町 適山 其脛 沾洲 掃尾 素英 内野 唄言 洞滴 白雪 紫紅 沾德



秘藏さや醫師にだかせて紙鳶

百猿

桐火桶に抑、貫之が萬葉の歌には、これらぞまことある歌といへるに、

日くれたり今かへりなん子なくらんその子ははもわれをまつらん

子に飽くと申す人には花もなし

翁

迷ひ子や一膳ひえてさくら花

序令

折とても花の間のせがれかな

晋子

孫どもの蠶やしなふ日向かな

同

袴着や子は決唇でも三郎兵衛

青流

楓子みたりめる女子を祝して

蟹尿にうつろふ花のいもとかな

晋子

はしり初たる日

百舌鳴や赤子の頬を吸ふときに

同

産衣に夜の目もあはぬ若葉かな

倫女

三輪女祝ひ侍りて

鶴龜の合器も御齋のしづく哉

沾洲

みやごどりの序

僧 専 吟

なにはあたりのうつせあはびを、うかむ瀬と名けて、奇物となせしは、身をすて、こそのはれごとより出て、遠き境にもしる人すくなからず。こゝに扇徳と云人、その俤をしたひて一ツの器に盞をしつらひ、硯、懐紙やうのものを添て、風騒の人々に句を乞。これをさかなになして、酒の興をあらしめんとす。箱の中の貝なれば、二見のうらなどゝもよぶべかりしを、都鳥とはもしむさしの國の名物、京には見なれずとにや。それにしてはふたつともたよりうすし。たゞ水鳥とのこゝろなるべし。

花と見てのまるゝ水やみやごどり

専 吟

盃開眼の後、亭主なれば一ぱい仕りい。

宮 古 島 先 尉 どのゝ 扇 かな

扇 徳

京、大坂、諸國の水鳥、此蝶面にのらんとて、日夜參會しける人々、一句一盃はもちろん三盃一句、五盃一句と老若男女、着到に付たて侍れば、あらたに酒徳の顔を見る事いかならん。玉たれの内へもはどからずして、此後序をもとめ侍りしに、

元祿水馬の年、都鳥あづまに下れる詞

晋 子

こゝに小判あり、ぬすめば首がなし。捨てばたはけといはる。



佛をつくれば善人とよばれ。書物をかへば智者となる。

分別の外に、三斗入、満願寺のから口をととのへて、月花をもてなすこそ誠にこそよけれ、こそよけれのおのこ成  
べけれ。其男の秘藏し侍るものなれば、すゝむる功德ともにむかしの其角になりて、やう／＼半盞をかたんけ侍  
るとて、

炭 う り は 炭 こ そ 斗 れ 都 鳥

此主源左衛門なれば、雪には鉢の木を切くべて、扇の徳を御舞いへ。

着到の句々、しとけなきまゝに略之。

此比、袖のうらといふ盞の發句を勸進したり。いかならん旅客にや。其貝いまだ手にとらねど、源左衛門が貝よ  
りもやさしくて、袂より出たるならんと、

白 ぎ く を 貝 の 身 に せん 袖 の う ら

賢<sup>トシ</sup>賢<sup>カ</sup>かへがたきものが、

口 紅 紛 や 世 を かる か や の 浮 櫻

來 示

浦 あ そ び

元祿十五年長月十六日のあさなぎに、釣好ク人にさそはれ、海晏寺のみぢに心をそめて、品川のいそわたりせ

し事有。折からうなむらば、蠣あさりとするわざの、うちはるみてうらかなしく、芦邊の鷺のかたし立たるも、友  
ほしげ成に、かはらける小舟の間より、雀ひとつおりてはたち、おりてはたち、いさごをはなる／＼かとみれば、  
萩のうは葉をこえ兼たり。とびあがりしやうしといふらん。似ぬ鳥を犬公がよぶもあはれなり。と、冠里公の御  
句かたり出て、氣色をこゝにおもひあひたるに、左にはあらで、蛤の貝に足をはさまれて、翅にまかせぬ也けり  
従者とく見て舟より飛で、たゞよふ雀をとらへて、貝をば小刀にて押わり、つばさに息吹かけて放ちやりぬ。足  
いたげ成さまにふらめきながら、からきめしたる聲ちう／＼とよぶ。角なうして穿つといひし、磯屋のかたにか  
くれたり。貝ひろふ子等は、舌切雀などはやすめり。月令<sup>ニ</sup>季秋鴻雁來賓<sup>ス</sup>爵入<sup>テ</sup>大水<sup>ニ</sup>爲<sup>ル</sup>蛤<sup>ト</sup>。註<sup>ス</sup>爵爲<sup>ル</sup>蛤飛物化爲<sup>ル</sup>潛<sup>ル</sup>  
物<sup>ト</sup>也云々。まことに盛陰に應ずる形とかや見えたり。今の有様げにかなへり。飛物の氣ひそまりて、穗末の粟、  
芥の虫に心をかけず。砂中の蛤をさへ喰なすにや。爲の字を成解する心に見は、月令ノ文義もいとおかしからめ  
と、私の見を加へ侍り。されど西國あたりにては、すゞめの蛤に生を變<sup>カ</sup>たるを見しといふ人もあり。是其時理自  
然なるべし。我見しは水はしりにて、鼠の赤貝にはさまれしこそ、時候は忘れ侍れども、鼠化して鶉と成といふ  
よりもおかしきもの也。生命をあらそふ物、これらにはかざるべからず。いづれ論ずるに益なし。石の蛤、二か  
はの貝、干氣貝のうきたる、これらは捨ていかにも砂なき大蛤をゑらせ、松笠につまじへ、あふぎたてたる風  
の音、をのづから松風颯々たるに酔すべらんこそ、

續 み な し 粟



懸出の貝にもてなす新酒かな

晋子

此句にて船頭も一盃せよといふに、新の一字に鼻はぢかれて心地よしと頭ふる。とりあへず押へこととして醉言して曰く、上代のさかもり、貝をもて賞翫せらるゝこと、頼朝どの、御濱出に、土肥の實平が御もてなしにと舞する也、亦横山の聲引出に太郎蝶、次郎蝶とてある貝の實に、伊豆相摸の領を入れて、三盃づゝはほさせたりとかや今もかけ出の同行とも、郷侍の家に入て、肴の料乞たるに、時にとつての早稻<sup>ツツ</sup>作<sup>ツツ</sup>り中酌<sup>ツツ</sup>なんどもり流すに、貝の腹八分に見て心よくほし、禮貝吹て通るもあり。盞はありあふものにこそ、酒はたしなくてならぬもの也と酒惜みすなれど、雀の命ひろへるにめで、生前の一樽を天目にてかたぶけ侍るは、いと心ほそくや。

蛤もこゝすみよしや酒惜み

朝叟

ますほの小貝ひろはんこ、種の島に舟のり出たり。法花寺にあがりて酒のむ。

浪の間や小貝にまじる萩の塵  
みるくひや末つむ花に貝合  
黒海苔は跡へおよぐや帆立貝  
ほら貝の筒音を聞くあつさ哉  
寄蝦の夜寒さこそとつめた貝

翁一雀  
谷羊  
專仰  
堤亭

所から菊や小春の海津物  
鶴を撥とや月のいつくしま  
いたら貝われても末に臺所  
申貝に師走の風のはづみ哉  
赤貝の新山守やおぼる月  
今切の片荷に氷る虵かな  
蛤や小進ものゝ大屋敷  
蛤の番は丁兒に霞みけり  
あすの夜の月にはまけし板屋貝  
雲丹貝の上着也けり黒小袖  
ほらがいの跡に竿さす尾花哉

青流  
百里  
竹意  
其道  
功悠  
里東  
曉白  
掃尾  
己郷  
大町  
貞佐  
谷羊

日本紀のゆへあり

遷宮おがまんさて、みの國立出るに、船にのる所まで送り

る人に



蛤のふた見へわかれ行秋ぞ

貝十五

晋翁子

貝つるや白洲の末の流れ松  
行春や猪口をおしまの忘れ貝  
海松ふさや浪のかけたるほらのかい  
かげろふや小磯の貝も吹たてず  
すだれ貝雪の高濱みし人か  
汐干なり尋ねて参れ次郎貝

元日に真珠喰あてたる人、扇に句を望めり。其年出身の

幸あり。

夜光る梅のつぼみや貝の玉  
石ひとつき清き渚やむき蜆  
われからとすゞめは雀からす貝

文月をかれて刺鯖を獵領し、世の人の祝ひぐさす、こ

鯖切のかへもへけり大赦まで

いはしは性柔弱にしろし。潮をはなれて忽に死す。

鯛俗字なり。よはしと訓す。おもらさはいかに、

小いはしや一口茄子藤の門

白菅の宿過るに、中鱈くさうるをみれば、大小のその  
中に見えたるもおかし。商人の誠にその中をさるものこ  
そ。

世中をしらずかしこし小鱈うり

歳の暮

鯽荷ふ中間殿にかくれけり

晋子

うち出の濱にて

十六夜や海老煎程の宵の闇  
鯰さえあふのけに寐る暑さ哉  
御茶壺に白川とても鯉かな  
小海老よる空や小春の水の文  
鮫鱈やしころは切て高笑ひ

翁野徑  
檀泉  
潘川  
甘巳







てりかつを 附り河豚

松魚本字とすべしとぞ。堅魚。延喜式

いはゞ文史の賞翫とし、貴人の上珍と成もの也。牡丹の紅その切目を正し、杜鵑の涙に錦手をそめたり。さつまがた沖の小島に物ありと、松江の浦の鱸を二にし、往吉の御前なる鯛の後段に成事、時を得て譽レあるもの也。初の字に一朝を争ひ、夜の字に百金をかるんじて、まだねぬ人の橋上に、たゞすみあかすまゝに、一片の風帆をのぞんで早走りを待て、公門に入時鬼の首とる心地したり。南溟、東海の魚龍、一番鯉と名のらせ、其威を犯せるものなし。渦輪、横輪、古瀬、小鯉の一屬、目鹿、眞黒の兵とも、駿、豆、相、武の浦々に魚陣をなし、餅氏筋鯉、霜降り、秋堅魚、濱切、岡付の族、一味同心して、火あて、雉子焼、あら煮、うしほ煮の手をつくすといへども、昔は下部のみもてはやしぬと書れて、臺のうへの献上をゆるされず。一疋不調法ものにはるゝ事、今さら浦島の子が悔ミにして、恨み中打に徹し、はらもにせまり、血合にくるしむと躍くるふを見て、いさめていはく、河豚は西施乳と比せらる。其意味を忘れて性つねに怒れり。世人皆醉のこと葉をかうむる事なかれと、盃をとりて、

かまくらは活て出けんはつ堅魚  
堅魚うりいか成人を酔はすらん

翁 同

此句人をいさむ。こよひ其いけるもの、

揚貴妃の夜はいきたる松魚哉  
夜かれせぬ君が聞へと堅魚哉

角 青流

白兔公

冠里公の御園にうさぎを畜たまへり。中に妻兔はなくて子を生す有けり。これかの月にむかひてをのれが影を孕めるもの也。さればこそいとかよはくて、青艸、菜、芹の露をもてなされ、冬は爐邊にちかより臥て、枯葉、さゝの實などを味はふ。其かたち白蓮のつぼめるを、たなこゝろにのせたらん大さしたり。屬従して御側へめしけるに、樊中を出たりし心より、人におそれて飛さはぐまゝに、左へこえ右へせくゞまりて、文臺へをどり上り、硯の中へ足を入れて飛まはりければ、雪の白玉を墨にこがしたらんやうにて、あやなく汚れたるに、やるかたなく御氣色をなんそこなはる。近習をのゝ手を握りたるに、予、放言していはく、硯にあふれ、墨にそむこと、かものゝ性、天然、筆にむまれつきたる也と申したれば、御笑ごとに成ぬ。臘月の末つかたに、兔の子いつゝ生れたるに、

年をとる兔にいはへいらぬ豆 角

三方に綿をのせて、雪の富士などいふ當時の興を、もよほされしに、



つみわたに兎の耳をひきたてよ

同

長柄の文臺の記

貞享甲子の年にや。河村瑞軒といふものに、おほやけの仰せごとくだりて、難波古江の埋れたるを堀て、船路の自由ならしめよとの、恵みあまぬき御ふれに付て、都鄙、菟藁のものども、膏澤の歩にさゝれて、まいりあつまるほどに、なんなく山をつきたて、淵濱さらなる川筋となれり。さればかの名橋のあとは、今はわたりに成て、その封境をしる人まれなり。こゝにいにしへをあふぎて、今の物數奇しけるともがらも、こゝらあたりこそ其古杭はあらんなどゝて、おぼつかなき世の幸を得まほしく、奈裏までもと、うちたつる人の力に任せて、この埋れ木を堀出たり。往古稱美のかたみにして、ことにたくひなき板目なりければ、朽にしまゝにけづりなして朽せぬ名物とはなしぬ。いはば山の井をすゞりにくませ、漬菰を筆の軸にきらせて、みちのくに紙のあつこへたるにかさねたらましかば、人麿の神も其左にゐまし、赤人の神も一座の句所をあらそひ給ふまじ。誠にありがたき寶ならずや。よりて當時の人をして結構に文詞をかざり、和歌、連評の讚、まち／＼みちぬを、予もその數にくはゝりぬべきよし。故實はいはずとも、さとしければ今の事實をあらはして、かゝる時代にむまれあふ人、疊の上にしてたやすく、此重奇を拜みぬるよろこびをのべぬ。其信うたがふ事なかれとしかいふのみ。

もる月もむかしの橋の朽目哉

晋子

大原木のことは

初瀬、難波の市女笠、柿の前垂ほのめかして、いづれ昔をわすれず、織殿、染どの、水仕かのこゆひ、牙婆めの被すきかけ、白くたちわたりて都大路のながめ也。河内女のきはたとるつま袋に、姫そしりといふ繩手を行こそさかしらいひて名はたちけん。越路の女は、糸機のをざもせで、奉書、鳥の子すき出す。うすきちぎりはむすばざりしをとよまれて、なるか川の瀬枕に、をのが妻をや定むらめ。おほよそ鳥のざれありく名はたち、君のいたづらにひとりねしたる河原こそ、川風寒し、さる淵瀬を朝ごとにわたりて、暮ごとにをのが一つれ、引連たる牛のひづめにそふて、八瀬の山家にとまりける夜ぞ、雪かき分しあともとはれて、祇法師の三吟せし古意をうらやみ、事たらぬ佗寐に友をしのへば、飯には石をかみあて、茶に藁しべを吐出して一夜明しぬ。誠に此山里の佗を求めて、閑放の風月を興じぬ。祭の子等に花折そへて、やさしがらせけん賤とないひそ。女院の侍士より、今も俗夫におぢずして、柴うるにも背むかひてあしらへば、よしある賤とこそ見ゆめれ。

やぶいりや牛合點して大原まで

一とろに拾になるやくろ木賣

をはら木や紅葉でたゞく鹿の尻

炭うりやおぼろの清水鼻を見る



荒神口にて、一とよみどよむ聲殊にけうとし。中にも釋迦よくとよぶを聞て、名のおかしければ、

さかとよぶ頭も雪のくろ木かな

雪山の法の薪をつみけん、身のこらしめも、入相のかねに、ふとおどろかれたり。

水戸黄門の君、山庄に黒木茶屋うつし給へり。酒旗、夕陽にひるがへり、木葉かくさらへかたはらに捨て、しば  
く斧のひよきを窺かふに、たどならぬけしきのみ、風騒のいたりをおもふもはよかり有。

繪の中に居るや山家の雪氣色 去來

冬ごもり温飽にしては、ひとたきにさも、もへやすき大原木のあかしもはてず。入がたの月に顔さし出て、醒て  
ねかぬる灯のもとに、大原木をうたひてやみぬ。

後付

かも河の鴨を鐵輪に雪見かな 晋子

うす雪や大の字かるゝ山の草

きねかさき

方四寸の圓形にして、其色紫赤なり。梅檀の木膚よりも猶こまやかに、蹄のうらのごとく中くぼなり。厚<sub>サ</sub>五

分ばかり。

夕顔や一白のこす花の宿 晋子

抑、此杵の頭は、少長が宅普請の時に、大工どの一鋸にと、たのみ切たるくせものなるを、推車やがて拾ひとり  
て、一句を蒔繪にし、茶所の柱にかけて、日々を忘れんとす。然れば休の一字に心あるにぞ閑を得たり。つ  
らく角藏が勞を見るに、一日の休みなく、百錢をまうけて、黒飯を押しただひて行なふ躰、盤中の糞、粒々辛  
苦の吟尤重し。こゝに京、大阪の座より、千金を積て少長をまねくといへども、三の富ミ心にまかせたれば、今  
年も草庵の月にかこつけて暮ぬ。其勞方寸の胸中にあればなるべし。坂田、山下がこゝに老たる。多門、嵐等が  
名ばかり聞へたるにも、身をやすうせん事を願へるもの也、錦繡に汗したりとも、裸なる場は白前に同じ。六祖  
のひとり信濃の國より再來して、推車に杵をゆづるもの角藏。

杵のれ 心水草

金のあふぎに、牡丹帯子のたばこ入に、菊の句とはよのつねあるべき事也。おもはざりき、きねの先に夕がほの  
句を見んとは。かかるくだれるさまのものながら、やごとなき御手にもふれけんこと、優にめでたきたぐひなら  
ずや。さるをおかしきおもむきから、もしは隱婆羅鬼童子が腕の小口切といふものあらましかば、いかなる句を  
か得られんとひとり、たなごゝろをたゝいて、その杵の柄はいつか朽んとゑつぽに入。



大名も夕顔なくば杵の沙汰  
 挽切て杵にわかやく涼みかな  
 夕がほやまたき灯さぬ局口  
 ゆふがほに山伏見れば暑くろし  
 夕顔や須磨に咲どもこけら葺  
 蟻螂の夕顔へ来て我なりと  
 夕顔や沓かへ宿のまくらにも  
 夕顔や氷室屋敷は火もたかず  
 夕顔や不破の關屋はおとし穴  
 夕顔や竹馬かゝる椎のふし  
 ゆふがほに昔踊や上つかた

祖師の自畫賛  
 ひるがほに米つき涼むあはれ也  
 晝顔や穴のいはれを居酒屋呑

心水  
 推車  
 秋航  
 專吟  
 昌貢  
 幸輪  
 大町  
 一雀  
 文竿  
 沾洲  
 竹意  
 翁  
 青峨

あかつき傘

剡溪の雪に徘徊、待乳山の時雨に徊りて、心ありげなるを、妻なく子なかりし時の樂とせしかば、閩中の力としたる間さましこそ、胸いたかりし其吟三、

曉の反吐はとなりかほとゝぎす  
 夜こそきけ穢多か大鼓郭公  
 ほとゝぎす曉傘を買せけり

傘うりの曉ばかり来るものは。月夜の魚うりは本陣につく心地したり。物の哀れもこゝにしらすばとおもふに其裔か閑所の額に、曉笠の二字をまうけて、時鳥のはつ聲をまたれ、來示が筆を躍らせたる物、傘うる時と名づけたり。西鶴が口拍子をからす、朝湖が虚舟よりも、かるき事どもなる中に、△孝ある人の子、△禿の親の手形すますに、文語一ツ／＼よみ聞ふるに、わろびれず判して、金のかた一目、娘のかた一目見やりたる、年月のたのみ哀にも、△かまれて来る猫、九月みそか、十日ついたちの比、客前も拵へぬ料理場の下に、かるきすだくこゑ。△二階へあがる音はたえて、わざとならぬ灯のかけに箸削る。△ことにしばぶき頭痛くなやめどくすり遠慮したるをんな、見せ男をまことにあしらひたる憎くて哀也。

△風の夜駕籠、誰を待てか、△妙喜堂の末枯、△角前髪に似たる月影に、心ぼそげに残る客の中杉、つかひへらし



たる文もかゝれず。荒たる家の分散とは見えて、庇まばらに天水もかはらぎ、破れめの障子の弓、所く落て、いとあらうはあらぬ風の吹あてたる。  
これはいつもあるかたながら、鎌倉へいきたりしつれぐ、冷飯といふ名も、うき世に佗しかりける時、思ひつどけたるなりとかや。

勘當の月夜に成しすゞみかな

いづこよからんありかばやと、そぞろがましきも一ねざめなりけんと書て、來示に送り待り。今はお小に耻といへば、

子もふます枕もふます郭公 角

子規人を馳走にねぬ夜かな

女郎屋、客屋といはるゝもの、假にも無常を觀すべからず、といさめしに寢過しぬ。

ほとゝぎすたゞ有明の狐おち

告口は仲の町なりほとゝぎす 大町

時鳥くまがへをよぶ寒さかな 其幄

寢て見るさくら

洛の涼及は有馬氏にして、ぬなかにもしらねながら、いでそよ人を忘れ、己れ忘れたるもの也けり。貞享の比、天脉を診み奉るべきめしをかうむりけるに、其時暮にうちほれて、まいらざりし罪にて、山科に追放たれたりしかど、明醫肩をならぶる者なければ、やがて都にかへし入られて、その名いよ／＼高し。日比に好ば百貫にて茶碗を來め、撫子とよぶめり。季吟師、北野よりのかへるさに、涼及が家に休みけるに、薄茶をもてなし侍るつゝで、彼百貫の茶器を見ばやと望まれしに、たゞ今薄茶まいられしが、夫なりといらへけり。老眼よりは心闇く、あからさまに所望して、手を取たりと申されしか。年比の春大きな櫻の盛なるをこきて、根は弧に包めるまゝにて、縁の側にうち倒して置り。うつしうへんとての花なるを、かく無下にせらるゝはいかにぞやといふ者ありしに、起て見る花は、いづくにも植てある也。寢て見んために、伏木のまゝにして、打こかしたりと答へぬるに、自性の愛に溺れざることをしれり。茶碗を魂とし、百貫を沙石とし、麗花を塵芥と見て、一日の生路を安慰し、心を孩提の童のごとくに樂しめり。誹諧興行すれども、ぬしは一句もせず、人の句を聞て味はへたり。せめて一句はあれかしといへば、脇よりあげ句まで、一句／＼に付て見侍れども面白き句もなし。無用の句を云出さんばかりかぬ藥をもるに同じとて、満座まで連衆をはやしたて侍る。いと興ありけり。喜撰法師の心ばえをしれる方すにや。山月の曉雲に映する一跡、今さらなつかし。知音の心を、

花の鐘けふも暮ぬと聞者哉 涼友

八重山吹は京へ出ぬ人 其角



臘月鵜匠の家にしじかひて  
 鼠を熬レばたれも甘かる  
 裸身に大わきざしの草枕  
 榑の雲よ暑うなる端  
 湖 春 及 角 春  
 三吟のむかしに成ぬればあとなし。

改元の祥吟

ことし三月正當三十日 御城に於て革命改歴の御よろこび申あり。出仕各午の上刻。

寶 永 の 給 に か は れ 米 の 霜 冠 里

寶祚惟永輝光日新杜子美句是、此熟字を以て、山呼万歳をことぶかせ給へりとかや。此日八十八夜にあたりければ、星と霜とにむすびて、花の色にそめし袂を、おほけなく世の民くさにおほひ、曇らぬ日影、四方にあまねき御めぐみとなん、仰ぎ奉り給へる御句筋なれば、三月盡の題に沙汰し奉りぬ。改元の詔、本朝文粹、慶の保胤のこと葉にいはいはく、唐堯の馭民いまだ年號あらず。漢武の撫俗はじめて建元の號あり。それよりの例、休祥災變によりて、開元革曆のためしを引、天元六年を改めて、永觀元年の大赦、天下徳政の化育にほこると云々。

今案藤經嗣卿北山行幸記、文武天皇より年號なども定まりたる事に成て、後は醍醐の御門こそ三十三年まで御

位にありしが、此時にこそ格式などいふ事をも定られたれ。誠に聖徳のいりは、天いにしへも、應永のけふも同じかるべしと書せ給へり。北山殿は鹿苑院准三公義満公也。行幸は應永十五年三月八日也。

去年の冬、震火、溺亡、世界國土の苦みを、西の海へさらりと流して、あらたまのとし甲甲の卯月初めの日、あらたに浴みし、新夕に衣かへたらん人の心あらたなるも、日ニ新ナリといへる句の心ばへならん。此御句にこと葉をそへ奉るにつけて、天下泰平の奉幣の使に、逐つかん事を祈侍る。

兎 した 氣 で 伊 勢 迄 た れ か 衣 更 晋 子



類柑子文集 中

御玄猪

細川家の茶道、京都の御内縁につきてのぼりし比、近衛左大臣基綱公御茶にめして、御手づから御菓子を下し給へり。碁石形して色々に染たる餅也。猪、仰せ下さるゝやうは、此餅はきのふ御玄猪なりし宸宴、供物のあまり也。いたゞきおさむべきにこそ。されば王道の興廢として、今は國栖、腹赤の奏、十月朔日、氷魚といふ魚を公卿に給はるなどの舊例その名のみなり。爰に丹波の、せの郡、久路の庄より、御玄猪餅の名也備へ奉る事、内寮より是を行ふ也。昔をしのぶべき御心ばへとかや。ありがたきことに感じ入奉り、涙をつゝむ袖のつとにし、餅をばやがて懷中仕りぬ。御茶の具すべてかはる事なし。御掛物、極の一字の墨蹟也。是は道風の大極殿をとのへたりし下書にて、代々傳はり來れるを、大と殿との其中をとり用ひさせ給ひて、尤、御重賞の珍奇のよし、かやうのたぐひあまた御寶藏にありとかや。凡家にはおつまじき物也。俊成卿の古今全部も、御書棚に拜覽したり。

三の蓮

江州田中村に田中勘左衛門といへる農夫、はちすを好で、千もと四色の靈藥をあつめ、池をふかめ、砌をたゞし、島輪をめぐる小船にうかんで、心の水濁りなく、獨樂の閑さらけにうき世の交をもとめず、あやしき人の名にふれたり。一とせの夏、さまざまに咲くるへる事ありけり。愛蓮の詞いまだしらねども、すける心より名付たるおかしくして書とめたりし。

一莖に七輪の花を天子の蓮

一莖に三りんの花を武士の蓮

一莖一輪はつね也とて百姓の蓮

とよぶ。其名、國あまねく聞えもれて、諸人此花を拜みに來ること、天人の影迎、ぼさつも天降ます心地して、ありがたきためしにいひはやらし。むべ一郷に榮えたるもの也。七徳は天子の瑞也。三徳は武士の鑑。一蓮は勘左衛門が菩提のたねなりと、念佛三昧の心ざし淺からず。汚泥にそます、邪觸の胸を洗へるに、鬼神この靈の異香を惜めり。

謠の説

羽衣、實盛、ゆ屋、うたふ、そとば小町、熊坂、祝言、と手の揃ひたるを見侍りて、昔より諷あやまれる所、文字の巨釋を云人あり。いさゝか愚意を加へてしかられ侍り。



△その名も月のいろ人は

三五夜中のそらにまた

月のみや人也。宮と色と行草のやつしを寫しあやまる成べし。月の宮古に入たまふ、とうたへる本義もあり。

△をのれは日本一の功のもの

くんでうすよとて

功の者と組、打すよとて、力者をあざ笑へる詞也、打テウの聲にまぎれて、ことさらくんでうつと書たるを、くんでうづよとうたへる也。くんでうつといふ説はわろし。

△こゑも旅鴈のよこたはる

北斗の星のくもりなき

北斗、星前ニ旅雁横る。經角堂は輪藏なり。北辰を柱にして廻る也。弘誓真如海の文により、城南淀河の運送回船の爲に、常灯明をかよやす。其光、北にあたりて、

△くもりなき經角堂はこれとかや

金森宗和上洛の比、清水に詣給ひて、この灯笼の倒れて、苔に埋れしを寺僧に所望し、吾妻の奇物として、今に芝の御屋敷に居られたり。

△うたふやすかたのとりく

烏頭、善知鳥ともに不審の字也。東奥の商人、船にて松前へ渡る人のいへるは、蝦夷近き村里、島々の獵師ども呼子鳥の笛などの類、鳩吹手合などのやうに、品々聲を似せて鳥を打をさして、うたふくと呼ぶ也。打追の心成べし。それをやし立る列士のもをやすかたといふ也。うたふは親、やすかたは子にて、列士狩に出る、ゑびす共笠にかくれ、蓑にふす有さま、やすからぬと作りかけたり。卒土の濱、東夷をさす也。鳥類さえ親子の愛情はふかく、血の涙にさけびて命を惜むに、夷狄の其心なき因果を説て、殺生を戒しめたり。

△一夜、ふた夜、三夜、四夜、七夜、八夜、九夜

此夜は一興、二興、三興、四興、すべて助字なり。五六の残りたるを分別して、榻の端かき、百とつめたる數を合せたり。

一ヨ、二ヨ、三ヨ、四ヨ

是を四と立て、七ヨ、四七廿八、八ヨ、四八卅二、九ヨ、四九卅六、都合百の數なり。軒の玉水とくく指折たる也。

あらしやうやひかんとて

心よはくも引けるか

嵯峨本の假名の洒落なるゆへに、

あゝやうや。嗚呼危うや引ん



と書たるを寫したがへて、筆肉をうしなひたる文句と見えたり。章句のさしまどへるにはあらず。遊樂回雪たるうねめ、十悪八邪のまよひの雲、入聲去聲にて諷ひ流す所、うたひ消す所、句斷、字義にかゝはらずして、面白く諷ひなす人感應なるべし。

國栖のうはやたまへは、姥聞たまへとの文句也。聞やのやつしを讀誤れる也。

万句 半面美印

足跡か はく 飛石の露

盛久の長居はたれか氣をつけて

鼻のかけ聲をきく鼓山

御輿はとうに覗く芦賣

泥龜焼に松茸の甲

山田守僧都の身こそ寸莎に成レ

双六の筒から直に手を握り

玉藻が智恵も犬ぎらひ也

万句 五字印

界限の寺は幾つぞ大砂場

切レをよく見る伯了が親

家々の名所

物に倦る時は、身の隱家をなどおもふも、はゞかりながら、岩ほの中とても遁るまじき世中也ければ、心の行處をかぞへて、鶯鷗の友をさそふに、五十にて四谷を見たり、といへる嵐雪が怠りごと、奥羽へかよふ商人の松島雄島をしらぬ族、塵につき玉をひろふ、心まぢく也けり。いざとて誘ひ出れば、先、辨當の事を問てかりにも行處をいはず。ひたすら富る者の後にさがりて、うかしく日を送るも有。良基公の御記にも、遁世を表はして心を漫り、名聞名利に紛るゝ者は、頼政が射侍りけん、鶯のごとし。猫にもあらず、蛇にもあらず、狂亂物狂の至極也とかゝせ給へるに、我もその鶯なるべし。こゝに國の數六十六部の法華經納めたる僧あり。名ある野山の末に心の露をかけて、佛を忘れず。一日物語しけるは、御當地の榮えたくへて物なし。東叡山中堂は日の本に一ツの影をうつし給へる靈場なれば、花のかほり鳥の聲までも、日枝よりも猶ほころばしう心地よげなり。日光には莊嚴壓れたれど、池は廣澤よりうつくし。遠樹、高閣、風景、涌いでたらんやう也。淺草川、隅田川たえず名に流れたれど、加茂、桂よりは賤しくて肩おちしたり。山並もあらばと願はし。目黒は物ふり、山坂おもしろけれど、はてしなくて水遠し。嵯峨に似て淋しからぬ風情なり。曹司谷は榎の木立も昔ながら、寺もよし、三光などつね見ぬ鳥のから聲、伏猪の床もめづらしくはあれど、鶉鳴ふか艸山に墨染の寺、元政など聞ふるひじり住



けん跡忍ばれたり。遙劣れるもの也。王子は漲落一片の水に、曲水のたはぶれもすなる。舟にて行かへるよし。われもかうなど茂る。菊をあきなへる人の閑居には、茶園も所々にて、花園もうつろふ比成に、宇治の柴舟のしほし目を流すべき島山もなし。興聖寺、平等院につけても、詞をのこすばかり也。護國寺、御堂新たにして縁樹陰を重すぬ。町並きら／＼し。かけ作り吉野に似て、一目千本の雪の明ぼのも思ひやらるゝにや。爰も流れなくて口おし、筏さす人にあたら櫻のちりかゝれかし。深川の洲崎は、東南に圻て、安房、上總の山々を風帆につみ上たり。池上の塔に増上寺の茂みを列ねて、海原を彩どりたる形容、杜詩、韓文をあざめり。かの住吉をうつし奉る佃島もむかへども、岸の姫松のすくなきに、そり橋のたゆみおかしからず。須磨の蟹の汐やく煙ほのめかして、公家達のたゝすませ給ふ御けしき、おさ／＼似もよらず。宰府はあがめ奉る名のみして、染川の色に合羽ほしわたし、思河のよるべに芥を埋む。都府樓、觀音寺、唐繪といはんに、四ツ目の鐘の裸なる、報恩寺の臺の白地なるぞ、町繪の屏風立らんやう也。木立うすく梅紅葉せず、三月の末の藤にすがりて、回廊に莖をまふくるばかり野には心もとまらずと、一ツ／＼に疵物にしたり。無疵の名作は快霽の富士にこそ、三千世界をからげたりしといへるに、我もまけじとて、天に孕める地なれば、三藏法師の渡りしはて迄も、見るに心に心の止り、目を驚かす、蓬萊の山とこそは承りぬ。しかしながら世に劣らじと、勝槩の奇絶をつくされたる分限の殿つくりのうち、表はいらかにし茅にして、遠石兩工の物數奇をふるはせ給ふ庭山、細川どの、國石、土佐殿の良材、島津殿の蘇鐵、家々領分名木をあつめ、異禽靈獸をかひはなちて、靈臺靈沼の樂み、鼓吹の聲外へもれず。仙臺のとの、秣

刈、加賀殿の掃除の者、大路にせばまりてかぞへも盡さず。縁をもとめてかの山を見るに、三日糧をつゝむに見残すかたのみ也。千丈の瀧の白玉落しかけて、辛崎の松に禿倉祝はれたる所、松島、鹽釜なる姿、霞がくれの寺蚶滿珠寺をこゝに寄たり。香爐峯の雪とこしなへに、白い鷲を千羽かはれたる汀、廬山の雨を灯籠一ツにてもてなす處、杉ばかりの端山をば老曾の森と見はやしぬ、白鶴丹頂の毛こぼして、百梅に飛かはしたる砌、竹林の虎をつなげる窟もあり。是はむかし虎の生皮をうへて、珊瑚の醜を入たり。金の爪をといで、うづくまるかたはらには、孔雀のひな字したるが、芭蕉のかけに啼あり。櫻五百本、紅葉五百本、左右に錦の春秋をあらそふ。馬場あり。櫓の雲にそびへたる陰に、埒ゆひたてゝある所、犬追物し給へるあととかや。くちなしの爐次はこままやかに、木幡の山に心つけられたる物也かし。桐島の千入なる染井の山、立水臥水の清き流れ晝夜をすてず。これかの島好み給ふ公也けり。南天の冬庭あられふりしけり。木賊ばかりの庭、月のみがゝれ出るにめでたり。知行との菊作り吹上にたてり。牡丹の媒と成、蘭の奴となるもの京よりめしぬ。鷄鷄の扶持とる辻番、釋しれる犬飼、玉川の螢をあつめ、野火とめの虫ゑらみ、根合艸合折しりがほに、玉簪眞砂をならしぬ。貝敷る道雨にされて、月と霜との光をかすめ、瓦を疊める所、露しげく苔ふかふして、昔を忍ぶ亂草を拂つて、蛙樂を愛する隠居、舟さし習ふ女中まで、湖水にうかぶ粧ひを餉れり。大井の逍遙、志賀の山ぶみしつ、日も夜をふかめては松明して尾上に行通ふ。樓閣雲の底につらなり、轟鳴、谷に答ふ。牛を愛して紅の手綱を引はえ、羊を興じては明道の巾をまねぶ。居士衣に錫を鳴して、白兎の玉を躍らしめ、黃鸝の柱をゆるめたり。名鷹に獵をもよほし、奇犬



に山家を守らせたり。八重葎をのづから鄙の住居をやつし、春耕し秋おさむる業、五十三次の鞆糧をまうけ、驛路の鈴の音たえず。山關にねざめする男、竹の編戸にまろうどを名のらせ、かきつばたさきみだれたる澤邊には飯をほとばし、柴の箸とり揃へて、椎の葉の情に耽り、菓樹心のまゝにもぎとり、瓜田に杵をゆるして、起ふし己がまゝ也。車馬かまびすからぬこそ、柳のしだれたる所がらにして、笠に杖に清水をむすぶすがならし。此清水、御茶に献ぜられてより、世人水屋敷といへり。心越禪師の記、道榮、玄龍がたしなめる額、今めかしきにもあらず。隱元、高閑の清庭にうそぶける跡、潁川に手あらひし人、養老にわかやける形もよそならずや。蹄をひたし、脛をしるめて塘に登れば、洞庭西湖に生れたらんやう也、から人のうたふを扇にうつし、拳といふ酒のみかはして、蘇門の鸞鳳をまねくに、林學士に硯を設ごとし、季吟に花のもとの和らぎを求めたり。琴、琵琶の檢校法師、凧のしらべをかはせば、尺八、一節の名だゝる沙門、高欄ゆするばかりに吹ならして、山の鹿必ず來たり。笑はるゝ鼻、かなしまるゝ猿のみさげびて、憎るゝ蠅なく、きたなまるゝ虱なし。こゝに長安一日の花を見つくして、馬蹄に胡蝶しづか也。つくばやまのあまねきおほんめぐみの陰、武門の大家にたてこめたる名所、見ぬ唐土になどや心ゆかん。三都の賦にも聞へわたらず、御僧の納め給ふ御經にも、説のこされていべし。所望ならば何方へなりとも御供申しはん。

北の窓一章下

塗垂のうしろに一株高し

名 月 や 柳 の 枝 を そ ら へ 吹  
 茨 の ほ ろ こ び 豆 ぞ 飛 行  
 お 腹 と る 尼 に 砧 を と め ら れ て  
 正 宗 じ や と て 甜 て お さ む る  
 シ パ ノ と 使 ゆ か し き 中 益 田  
 足 半 は ね て 袖 は ら ふ 雪  
 水 漉 に た ま る 蚊 も 八 重 葎  
 琴 の 師 匠 を 待 ぬ 夕 ぐ れ  
 と め よ か し 兩 國 橋 で 流 る を  
 さ す が に 錢 は と ら ぬ 人 迹  
 か ら 白 に 力 車 の わ れ ら 迄  
 雞 頭 二 本 駕 籠 に さ し 物

嵐 雪 里 子  
 百 雪 里 子  
 晋 雪 里 子  
 嵐 雪 里 子  
 百 雪 里 子  
 晋 雪 里 子  
 嵐 雪 里 子  
 百 雪 里 子  
 晋 雪 里 子  
 嵐 雪 里 子  
 百 雪 里 子  
 晋 雪 里 子



紺屋とは人も仔知の名角力  
沉香もたかず居待立待  
せゝる手の乳房あらそふ蝸牛  
紗の金さえもふるされし衣  
近比は横に大原の花ざかり  
先孝をとふ人のおやぶり  
蛸引に手ぎはさえぎる巴也  
千住へ下る乗掛もある  
物狂ひ亭主早く名のらめや  
ふるき衾の柏からく  
あたまから烟のゝぼる墨衣  
はま名の橋やつらき橋本  
風に蕎麥きのふの花はもろくと  
舌うちをして何うらむ虫  
月と見て鼻紙袋ねぢふくさ

雪里子雪里子雪里子雪里子雪里子

乳母とよび出す渠が鹽梅  
穴藏の上の朝ぬもいとはれて  
股をこへしか命中山  
鼻墮て顔の住居の淋しさよ  
洗ひ河原に二番雞かな  
引粥に氷をのこす鉢扣  
瘤のそだつに老ぞしらるゝ  
番町の朱子とはやして花ひとり  
四ツの日影にしるむ山吹

里雪子雪里雪子雪里雪子

北窓後園二

業平の暗にしられし西瓜哉  
薄は月のありになるまで  
御用木一本乗を初汐に

潘里川  
堤東亭



ものいはねどもすぎき頼切  
 盞はつるにすはらぬ膝の上  
 下モ四五間はやふれしやうし  
 着るもく北條殿の紋なれや  
 畫に落涙は朝鮮の者  
 くれなキの心のこりて爪に虹  
 うはの空なる戀は木夾子  
 鶏の鶉鳴かもひとりかも  
 鴉てる月に大般若粥  
 足の毛を入むしれども關はなし  
 稻葉が末に寢衣ほすアレ  
 近年は終の送りの酒停止  
 せなかへ書て放す盗人  
 腹切のしかも笑ふて山は花  
 九の戸からしも遙春風

野曉晉

徑白子東川徑白亭子東川徑亭子

かへる鴈俊乗坊のきびすとも  
 是でも集歎笑止千萬  
 いはて山一ツとりはい御客なり  
 額ぬかせて夢のうきはし  
 回船の腹へよせたる蟹小舟  
 齋のかへりにあかぬ柴の戸  
 此空の碁盤の目もり定なき  
 命にかゝる五郎兵の露  
 紅葉狩鬼も糞入をかたづけ  
 川見分の水上は月  
 此馬に曲をのらばや普施戻  
 阿難迦葉へ銀子いさゝか  
 藪の色薄茶の稽古風そよぐ  
 柿かたびらは人に嗅れて  
 川音も吼わたる也加茂の犬

東亭徑子東川亭子東川徑亭子







鹿の近いは用心もなし  
月の事須磨は浮世の臺所  
乾のかたへ躍るやめきは  
籠ともに拾はるゝ子はおぼつか  
鉦の緒とつて音なしの瀧  
胡麻鹽に白きばかりを杜若  
しなへの相手馬場へかたまる  
住所もとめかねたる二隠居  
木具にたまゝ室のゑり物  
角頭巾へだつる雲の身をかへて  
大内山の寝せ石も華  
初寅や主人のための申事  
うどんを干ものどがなる哉

齋の灯四章下

役子悠流佐松流悠役松佐子役

侍友對酌

氷凝間を推も敲もしつ手卷  
聖人ひとり霜に小便  
野狐の尾の尾を苦勞して  
小晝の箸は土堤にさゝるゝ  
百莖に笠はあらしの仰右衛門  
城は六うつ鶉の行かた  
待月に障子ゆはへる鈍屑  
箱をひらける菊の切紙  
相應に鈴木院は栖あらせ  
卵塔道のついたさかやき  
手に入し算盤ぞなら松も友  
かたしく袖の跡は艦の町  
附子也と下され次第いひよらん  
冠者におろして光ある殿

虎艶風晋格

葉子士枝筭士葉子枝筭士葉子枝



鐵肌や月も氷の火打録  
關伽の仕切に水舟の着  
まれに來る人に驗氣を慮らせて  
親の枕をわらふうつし繪  
新疊是も芋に成袖の雨  
納屋のそろひにうつゝかの面  
漸十の家老を花につきたてゝ  
あぶない岡をつなぐ若芝  
餘引の高根の深雪ねばる也  
櫛をかさぬも小屋の者から  
ほつたては蜘蛛めく繩待ほうけ  
金柑ぬすむ指はまぼろし  
押賣の祇園守に松の月  
けんくわに付て廻る重勝  
驛長が會式の酒のたまり水

芋 葉 士 子 枝 芋 子 葉 士 枝 芋 子 葉 士 芋

足駄はかする柱よもぎふ  
調布のこれは穂待とさらすらん  
地震このかた見えぬ詫ぶれ  
白川の齒に衣きせぬ門の婆  
入子算より京中の籠  
うつかりを多勢が中へかざり索  
何を見たやら夢は菫蕩  
觀音へ印籠投ん船ゆすり  
たかるゝ柴もおもかげは夏  
白鳥にねぬあかつきの山嵐  
これにも月の木形切くむ  
孕み稻帯にはさむも色に出  
一口のるも鬼の相談  
喰分を柚山人の黙阿彌に  
たが子の太刀をかへす石尊

枝 士 子 芋 枝 子 士 葉 芋 枝 葉 芋 士 子 枝



宵廻り伏屋にをふる名のうさも  
兵部卿とはうたかたの粕  
目にたちて八日の籃の雪にあふ  
心の杉も籠にたしなむ  
一札につんぼ商人花のかげ  
鯉見てくらす外郭の藤

科頭に背けて、園中の閑をしる。

竹の尻を折ふし聞や五月闇  
花たちばなに一重口よぶ  
表具屋の珠數さらくに遣得て  
野ごゝろの時鶏に嗅るゝ  
潘シロインに染る艸葉の元結杭  
帆をよむ橋やよくの隙  
さし櫓の角文字たつる十三夜

葉士枝等子

晋百朝新嵐堤甫  
子里叟眞雪亭盛

枕俵は床の間につむ

全

禿から仕衣せとる子は蒲の中  
くもれば泪明日か大大  
今捨てふむにつたなき蜘蛛がら  
からす三羽の跡は歴々  
野鼠の頤さむし森の色  
二日酔にもしら河の關  
乙女子が傘たゝむ身は晴て  
今ぞ情も質屋からしる  
開關によい夢つぶす寅の鉦  
髪はきのふの中小性かな  
一袋繪の具をといて雪の山  
たが盃に先約の先  
月花もしらじ鞆鼓の出来て来て  
東海道にねり雲雀とは

阿眞子里盛亭叟阿雪眞里盛子雪亭



雪消て疝氣たしかに物申  
田舎がのかぬ手拭の脱躰  
たべつけぬなんひん餅を忍ぶらん  
長汀はてのしれぬ小便  
藤棚の卯月になれば竈干  
黄蘗を乳にむごいたらちめ  
屋形舟三日つゞけて樂配所  
土藏も人も老の兀ッ口  
行ぬけてもどりぬけたる柴屋町  
彌六仕まへばよその通路  
月よたゞ覺束なくも牛玉買  
文治の秋の判官を泣  
猿にても人につかへば一かゝり  
かゞみを磨て足を蹴く  
抹香を臭うおぼえし我昔

里眞叟雪子盛眞阿亭里雪叟盛子亭

餅の丸みを握り出すつや  
あそばれぬ鳥の林は晝休  
くどく側にて前髪を切  
君が手の相伴を待道成寺  
風に波たつ青天の蟬  
旗白を病人と見て鯛は花  
亭主の胴をつくくし哉

松の塵六章下

萬世のさえずり、鷗唇を轉じ、黄舌をひるがへす。

うぐひすにこの芥子酢は涙かな  
ちる約束や名残ある梅  
船頭のけんくわは霞むまでにして  
物書捨しあみ笠のうら  
隼の祭見る間や峰の月

晋子 應三 沾德 崑齊 周東

雪眞叟里盛子



無地には染ぬ千丈の蔦  
ことゝへば鳥のぬしも神の秋  
とまりくで狂言を出す

貞佐  
子三

此句につけて物語あり。中御靈に淺野稻荷とて、代々の鎮守あり。子葉、東行の時祈願のために參詣せしに、神垣の後に時ならぬ菌生出たり。是に納受の力を得て、奉納の三句を扉に書。

神垣や幸茸は人の笠  
海山かけて秋の物成  
かはらぬぞ月の桂の男氣に

子葉

これらの事おかしき、なき世語也。

臺の瓜こひせぬかたへころくと  
御前の肩を越ておもふや  
密法の徳にあらずや此肥り  
山小屋を出て光る印籠  
鳴千鳥夜衣は一問ほころばし  
鐘はちかうに親類の月

堤  
亭洲徳佐洲齊

靈棚へ足踏を鳴す鑰の音  
まる馬出しに成し踊手  
いつのころ袴やめての花意  
桶に野老は古郷の市  
はつ午にのれんの狐目だつ也  
座頭さびしくわかる追分  
鐵床を今おろしてや大鱒  
翠簾をふたへに残念な顔  
夕顔の病人ふへて宿せはし  
茶苑の太鼓泰平を打  
鞆丸の尻をからげて忘れ水  
三里をすへぬ是ぞ上藤  
首とつて首にかひある氷頭鯨  
目黒のおち穂參詣の袖  
あの鳥に心はとまる松の月

徳齊三佐子三洲亭子佐三齊徳  
亭齊徳子佐徳子三洲亭子佐三齊徳



神と君との外に足下豆  
金の珠數三尺繩にかけまくも  
水雨一とをり露の漉破  
信濃者京にまじりて夢ぞかし  
つるべの音も腹へとくく  
案内のその手はくはぬ花の雪  
和尚のいきり彼岸也けり

君臣の鹽梅をしれる人はたれ、子葉、春帆、竹乎也。

なき跡もなほ鹽梅の芽獨活哉  
ちる花はみな男にてなみだ也  
あしたには朽ても花や名とり川  
うどんげの名も横雲の柳かな  
灸すゑてちるべき時のさくら哉  
終に引汐に角なし梅の露

沾 仙 止 紆 宜 沾  
葉 芝 倭 角 雨 德

亭 佐 洲 三 德 子 洲

曾我どのゝ宮もわら屋も彼岸哉  
身の關を越て手をうつさくら哉  
その骨の名は空にあるひばり哉  
枝葉まで名残の霜のひかり哉

岡野九十郎放水、はじめて東へ下、八はしの處を問て。

四季咲は牛もくはずやかきつばた  
さいへりさかや。人々其橋の句を題して追善す。

八橋に墓をめぐるや春の草  
松寒き旅人のゆめやかきつばた  
ぬしやたれ素鎗のつぼみ杜若  
八橋や帷子ぬいで又太郎  
塀のりの八橋匂ふ澤邊かな  
かきつばたあやめも其夜月明り  
捨文も江戸のゆかりやかきつばた

父病死、みづから元服すと聞て。

菜 昌 灌 專 春 午 周  
花 貢 木 吟 船 寂 東

沾 貞 杏 朝  
洲 佐 林 叟



八はしの花ぞむかしの金右衛門  
かほよ花一株づゝのみさほ哉  
かきつばたさぞな衰込力足  
井戸ニツ八橋の名は春の霜  
をもだかの鎗を引也かきつばた

未二月四日

春帆最期

寒鳥の身はむしらるゝ行衛哉

子葉末期

梅でのむ茶屋も有べし死出の山

三月四日、追善、沾徳會。

其覺踏たるあとも雪の花  
羽の調子にて目に角か入  
丸太をのせて出る頻冬  
踏潰す家をつばめの笑ふらん

楓子  
琴風  
角吁  
入松  
晋子

午寂  
晋子

雨のうはさも脇差にあり  
やりて衆は魔佛一如に狭れて  
廣袖の雪見かへりに宿も哉  
恐ワくながら馬に煎餅  
何の遠慮に鹽やかぬ海士  
琵琶のねも身よりの鷹の一夜にて  
あたふたと行當たる女郎花  
しづかにくへばまんぢうに音  
松風さむしでんがくに寄  
荷は先へまことの立か明後日  
憎まれ鶏の結局勝関  
仁右衛門か人を置日を稽古にて  
君なき壁にのこる献立

沾徳  
横几  
凍雲  
角吁  
堵岩  
晋子  
沾徳

満座一炷香拜



朝 三 章 下之三吟

待乳山あかつき越て、夕こへて、いは崎の家居にかへ  
るを、

ましこ引霜よりけふの行衛哉  
同じ枯葉に杉の實の色  
差圖板爰には痺きらされて  
山川萬里法倫味噲で問  
入月や楫につれたる腹の音  
鳥驚かしてんぼふる也  
葛の葉の伯父公の撫しうらわかみ  
されば都の衿の世中  
千手堂一万兩のそば杖に  
鯨より武士に成すまいたり  
湯左衛門に谷のひよきを馴て聞

琴 晋 昌

子 貢 風 子 貢 風 子 貢 風 子 貢 風

他にすらせて壽見る墨  
楯小楯嵐と霜にやしなはれ  
月にはえある翠簾の僧正  
みそさといをのが翅を灰均し  
余その無常に古着かはうと  
瘦たうてつばなもくはぬ花盛  
これぞ雨夜の治郎双六  
捕ものゝ名にこそたてれ呼子鳥  
麩のあつらへは南禪寺より  
兎にかくに子方の親は闇なれや  
ゆるがぬ艸に脇ざしの汗  
た材の尋ねにいつかあづからん  
とをつあふみは君ともが國  
手の筋のそれさへ匂ふ心和  
蘇鐵やわぶる老の埋火

風 貢 子 風 貢 子 風 貢 子 貢 風 子 貢 風 子 貢 風



蓋飯の穂に出にけり紫蘇醬  
蝨にぬるゝ木津の枝道  
舟下に願主いくたりくれの月  
かれは薪にひろふ鉋屑  
氣ちがひのざんない所ほころびて  
人も臥目に懸河の臥座  
臺ながらつき戻されて羽拔烏  
みな皺面にお皮切なり  
花はこの加賀に傳はる五本骨  
雪間をわけてちやツと吸物

三の蓮八章下

しのばすの池亭

寐てかどへはちすにさそふ朝朗  
髭籠にあふはあふひなりけり

子風貢子風貢子風貢子

甫晋

盛子

百堤沾

木玉より木挽にいさみわたらせて  
牛はうしろに行水の邪魔  
裁物のない搦手は月寒し  
河豚の遠慮に窓のうなづき  
待空は足の大指をつかむらん  
うつす目色に御番衆が飛  
信心のけしき變じて釣り狐  
鯨もげにや文王の園  
ふかみ草一年分の付とゞけ  
曉の箭は天が下なる  
さゞ波や餅は持屋に落る月  
柿を祈つて剛力が汗  
内儀やら何やらしれぬ初あらし  
鏡ぞつらき藍蠟の髭  
花ぶさを押小路物にほはせて

里亭洲子盛亭里洲子盛亭里洲子盛亭里洲子盛亭里



涅漿像なきつる方を詠れば  
 金子を首にうつ山の越  
 元服ににげなき年のほととぎす  
 さゝやく人は橋で北むく  
 灯の喜見城なり藏坐敷  
 箸をかくして居へわたす膳  
 駈り狂ふ八人天狗天津風  
 雁來紅を君がこはがる  
 二本まで扇ひろふて月を持  
 ほとをりさめぬ鳴を則  
 藪山に希有な病を請取て  
 過しかねたる口に入相  
 風そふる縮はわたく成にけり  
 融をうたへ水戸の鹽竈

盛亭里洲亭盛子洲里亭盛子洲亭盛

スバくと甜からせたる星か火か  
 寺家から通す花の古道  
 山くの檜榎木いかのほり  
 墨流しなる水のかへる子

盛亭洲筆

歌の島九章下

戀一折、旅一折、

友寐して鍼立寒し戀の丸  
 齒涅もらひに霜の袖笠  
 よそにのみ早打みれば轟て  
 かぞふる鴈に爪のない指  
 月のうちの葛籠男はくもり也  
 伏屋のうさは酒臭い菊  
 うら問に落てくやし私語

秋晋専

色吟子色吟子色



御三所ながら同じ産月  
折からと四條を畫て繪帷子  
水の出はなを長と不和成  
はづかしや此かちよりの草履取  
筑摩の祭世にはぬり笠  
をしたてゝ蘭生の竹のすうはりと  
天の河瀬に化物の首尾  
涎さえ枕にぬるゝ月の色  
たれに抱せんすまふにもうし  
ちり迷ふ花に静も半合點  
白い齒見せよ猫も狂言  
ちゝめくや馬に嗅する菓子袋  
かゞみ山から楊枝めせ  
不住の身兵衛の時を語出し  
漕はなれては蚊をしらぬ舟

子吟色子吟子色吟子色吟子色吟子

居風呂を軒の鱸に覗かれて  
しのぶのみだれ仙臺の繪符  
残月に小遣ひ貳百文わたす  
波はよせてもうらのない足袋  
近道へすゝめ申せば揖まくら  
九佛の日記を十佛のソ  
松盆に逗留中をもしほぐさ  
たまゝあふは玉味噌に小菜  
夕烏ひじりの弟子を一ッなき  
あの山見さい江戸にない山  
大義して御本陣まで花に折  
請浦近しいさ櫻鯛  
うぐひすに心の駒の朝はしり  
上下の者のおぼろくと

吟色子吟色子吟色子吟色子吟色子吟色







一宮に十五ヶ村ば腹鼓  
海松からほどく尺長の貝  
たれあらん天の橋立奥平  
夕日にかざす袖も日三里  
幼少な隠元禪師花ごろも  
匂ひにはまる艸の焼餅

橋 非 黒 尾 子 黒

家々の名所章下

富士長篇、枕草紙、古本二、海は鳴澤の海さ有。八海のその  
所也。季吟抄にはのせられず。愚案、此草紙にすべて此山の  
事なし。書寫、鳴海の海の誤にや。

鳴澤や幾双の奇の衣がへ  
鷓蒼鷺も狩のさよめき  
風になびくもらひ欠をあの面に  
筆で心剪夜半の友閑

其 來 晋 其  
幄 示 子 裔

近松も松原遠く月は見す  
砂惜みなる菊の吹上

格 孚

枝 兄 子 裔

竹とりの翁さびたる稲庇  
大行あひやそれが初戀  
忍ばしき御綿帽子時雨ふる  
とけて流れて三階の酒  
呑料の煙をきざむ三穂がり  
鷹と茄子を浮橋に待  
來ヨとや打れてねたむ太鼓共  
月夜の反吐は鮫の罰  
をどり迄筑波に勝しお酌取  
朝鮮人のこゝろある鳴  
雪は花赤人の手にふるばかり  
おもひにもゆる胸は三ツユリ  
安部川をわたらば錦床道具

枝 裔 子 枝 裔 幄 示 子 兄 示 幄 裔 子 兄 枝



百疊石も鹿子半分  
 目の下に雨はふり來ぬ捨舎り  
 蚊やりりに鉤す扇あみ笠  
 粟とする水は六月十五日  
 岩本院の亭に上段  
 神奈川のあなおそろしの物語  
 はくりやうを待松に禪  
 時しらぬ梁の摺鉢雲を衣て  
 ハに見しに見ん有明の鴈  
 汐見坂北の柑子に牛の舌  
 野分せしより名も二見晴  
 入あひにお明くと持や田子  
 もらひの袈裟も百日の鬨伽  
 斗なき雪を湯にして酒の代  
 瓦坊主もむかしから今に

子 示 枝 幄 兄 裔 示 兄 子 幄 子 裔 示 幄 子 裔

堯孝のこよひ裾野を花の宿  
 四方の腰は白妙のんめ

枝 兄

繼目の御禮として、なみくの下官羽塞を出、時の宜しきに  
 逢奉り、此説をさく古郷にしらせばやま、いそぐ心の駒ふら  
 みせしに、晋子門送りの盃をこりて所望。

わがこふる南部二歳や後の月  
 一穂たしかに五百粒づゝ  
 木犀は肩うつ穂にふるはれて  
 瀬をふみ分の餅の穴  
 橋ト虹ト正に組ンで晴わたり  
 二車にて茂庵松の葉  
 鼻も目も藤倉山の睡虎岩  
 菟落ものゝ至極風藻  
 小普請の鬼に待るゝその夜はゝ

其 晋 沾 紫

零 子 洲 紅 子 零 紅 洲 紅 洲 零



指とゆびとのみとの交マユ  
 早追の褒美して行歩り書  
 帷幕のうちにはたばこ始マル  
 鷹鹿に五色の餅をうるくと  
 今の遊行は誹諧を月  
 松明の影に聲かの秋の水  
 否イ出なこひは沖の石舟  
 花に棚熊の拱ゴマキ見てしかな  
 檜原の辛夷諸白を吸  
 臥紅粉の色ほころびて春日影  
 狐づかひも門前の物  
 化さうな枕ながらも嗅ばけに  
 つながぬ舟やりん氣仕習へ  
 臺にたつものゝ哀や八代賀丸  
 鼻に袈裟や御隠居の顔

甘

子洲紅雫子洲紅雫子洲紅雫子洲紅雫

伊勢が鞍三途にかゝるつら折  
 龍の尾ぶりはもみ上た錐  
 鐵炮に釣瓶かけふる夕あられ  
 宿にゐたとはいづれ十月  
 一葉づゝ兎の弓にはらふらし  
 猿がみだれをきざむ松茸  
 八十島のもくめを撫る玉の露  
 藻浦團に泣蜚のみどり子  
 手力雄大飯ぐひを守り給ふ  
 この御出頭千手觀音  
 錫引の光を花と人の影  
 つる通りにも苑のこゝろ見

糟壁のすく迄引付らる。檀泉さ道くさして、

爰にのむ坐敷しつらへ網代守

晋

子

洲子雫紅洲子雫紅洲子雫紅洲子雫紅



鶉や松を一もと蔦かつら  
菊の間をから辨當に晝ね哉  
小車にいづくとまりのお鶴様

檀泉施丁しけるに、

雁遠し先これ迄は江戸肴

一葦のよる所、秋天万里、千帆漕もごす事かたし。

初鶴のしづくや襪に強風舟

二日の月か臍肚臍の耳

穴門のおくは酒もり柗して

一させ巡領に供せられて

象潟の岩を削るや袖の露

蜻蜒や日にてりわかる島衛

檀泉  
沾洲  
紫紅  
共零

紅泉 同紅零 零

里居リナニ章下

木葉に詩文など書て流したり。おもふ人の末にて、こ

りて見れば、里なつかしき事をしれど也。

御溝葉に恐れながらや忍ぶ艸

七百足をねらふ數さし

素建から月にはさはる角家にて

くもらぬ暖簾聲なうて呼

茶色鳩贅と申せば都也

子のものしりが椰子ほしがる

床の間に熨斗は置れて公いまだ

目影にわたす蜘蛛のふるまひ

ほのくと腹にたまらぬ明石瀉

段子あつめは拾得にこそ

ぬれた目につられく我は雪

ねばならぬかお袋の側

かもしぞと揃へあげたる露の皮

夕汐見え神樂觸來る

竹晋艶幸專

意子士 意子士 意子士 意子士 意子士 意子士 意子士 意子士 意子士 意子士



流し矢の身にはこたへて馬の尻  
 つれなし蕎麥やいけぬ線蘿匂  
 つれなくと初茸程に雨の足  
 風呂の手合へ月の金札  
 秋なれば諸行無常も太鼓樓  
 後のあしたは綾のおすべり  
 大毒の反魂香を花の雲  
 十八町を遊ぶ曲水  
 鈴子して禁野かた野の亂拍子  
 いほりの茶臼さればさる者  
 よび生て御膝にかゝる五ッ衣  
 すゝり團子も泣ぐ榧也  
 淺ましき鼻は奉書の作りつけ  
 重頼の名はきえぬ送火  
 鼓物もさすが岩城の月の友

子 意 輪 吟 士 子 輪 意 士 吟 意 子 輪 士 吟 輪 子 士 輪 意 士 吟 意 子 輪 士 吟 輪 意 子

ちればぞさそふ萩の染革  
 兎の子鞞に入て参りたり  
 むかしながらの五智の假葺  
 壺笠で遊女こさめれたび衣  
 沉のまくらを神鳴に出す  
 氣霽ては船をお留守に岡の風  
 猫かると光る宮守が婆  
 一撫に天の羽袖を五合升  
 大鋸しらぬ巻向の山  
 入札の若衆さんく冬がれて  
 鶉に吐せたる文が物いふ  
 白無垢は二襟かえてゆめばかり  
 竈を流せばやがて其まゝ  
 雉の尾の枝を漕也花のうへ  
 たうにたつ菜を袖に摺るゝ

子 意 輪 吟 士 子 輪 意 士 吟 意 子 輪 士 吟 輪 子 士 輪 意 士 吟 意 子 輪 士 吟 輪 意 子







頭巾とるゐぐいて晴る春の山  
 おもひの外に見ふし定小屋  
 投足に雨ふらばふれかき繪  
 穢多が崎をもれし土罐子  
 是やかのみ濃様よしの着心に  
 階子にたつは兩の手の君  
 佛はけぶりにくもの屯り喰  
 大三挺に蘆の香を引  
 昨今にのこることばのなかりけり  
 杵もひびきもしぶくとこそ  
 舌かゝる心わるさよ残る月  
 悠然として花にべカコウ  
 釣の魚蓋をたゝいていふならく  
 門でおぼへる六郎左衛門  
 御曼陀羅かゝれとてしも二百兩

其

泉 松 佐 洲 幄 松 泉 幄 松 泉 佐 洲 幄 松 泉 子

駕籠のいやがる生れそこなひ  
 矢倉には憎い面あり四方の花  
 つばめにてふに勝手はたらく

幄 洲 松

了喜庵に醉吟

先ッ皮をみやこの我に河豚汁  
 後の月汐さい鱒も契あり  
 初鰯や身従の醫師の遣ひ物

丈 五 其

松 出 幄

柿の繪

一休和尚自讚

冠里公の奇品として、晋子古筆を嚙で、六種の一ツをまね  
 たり。中く似るべくもなし。予其氣質の稟ッルひさしからざ  
 る事をする。今年ここに病僧成て、見たてから溢し。

うちまけて笑へやく柿俵  
 かた撫になる秋は山人

東 晋

潮 子



有明の鐘つき賃を催して  
 鯛のより舟もはじまる  
 藕のうす紫に火のほめき  
 むかふまゝの詩に辛い顔  
 瘰癧ワの笠にぬふてに梅の花  
 いひもくたさず蝶の口もと  
 春を世に辻やすらひの枕うり  
 遠見もありて城の塗きは  
 千歳に膳のす手のかけの廻る  
 五間つゞきに西日時雨る  
 鼻紙はもらひつかひの木綿坊  
 うかぬ軍と詠めくらしつ  
 海山の心にのれば刷毛をゆふ  
 宜禰かならひに負はるゝ巫  
 貝焼に月雪花とすゝりあひ

太双青

二九八

岱潮魚子岱峨潮岱魚峨子潮岱魚峨

奈良をつとめてやまぬ清涕  
 小表具の春の夕べを干てみれば  
 女中もさする岡の帆柱  
 水増は宮古の雲のうき名かや  
 ねらひの著フキに成し合歡の木  
 蛸フナなんど腹たつそれに任せたり  
 大御秘藏の利腕トを取  
 達摩寺に思ひ朽たる雨やどり  
 ふいご祭の素袍ト尤  
 水仙の膠付ケなるあさ氷  
 一くだりても訴状聞える  
 江戸者は伊勢の灯月白し  
 かはる淵瀬を色越への秋  
 桐惜みわが庵なれば切惜み  
 豆をくはうとかゝる味噌搗

二九九

岱潮魚子岱峨潮岱魚峨子潮岱魚峨



拍子木に左右をやつてくれはとり  
蒔繪の浦の節句淋しき  
名將の座榮各別花の咲  
中にぶらりのなど夢の春

筆子魚峨

金杉のはしにうち出の濱、大津馬、松本の牛も休めり。

皿鉢に駒の蹴あげや心太  
漁父にまいつた澤潟の風  
假張の延喜天曆苔むして  
凡手に入長安の矮鶏  
尿瓶の月推參の場もなかりけり  
上蠟かけば蜀黍の眞  
龍田姫背を鍔で撫て行  
羊をたたく皺皮の罕

横沾仙貞晋

鶴佐子几洲鶴佐子

みほつくし口中腫す火吹竹  
ひろひ買して歩る岡持  
迷ひ子と泊り定めぬ酒の酔  
飛鳥井紅をたれ様の墓  
のけ物に金の封切まくず原  
枕法度に名はたぬ月  
秋風や目にはさやかに骨擧痛  
原田次郎が袖は世の露  
花に來て物相飯も百人一首  
お湯桶までは遠くかげろふ  
講中が己ノ己を夕はらへ  
通辭をそこへ放す滄海  
内々の傀儡女をよぶ木綿夜着  
けふも瘡ふと夢ぞ悲しき  
瓢まで數にはもれぬ司めし

几洲佐鶴子几洲子鶴佐几洲子几洲



鱒にむかふ水の蟻螂  
大空を天竺といふ月見して  
また引負の扇一本  
掃キ庭に織流したる篩絹  
よし山婆へ雪車の餞別  
鯀の血をしごくばかりに相枕  
狭み素袍はいつのきぬく  
屏風好<sup>キ</sup>物おもふころは立こめて  
股のしこりをいはぬ濃つゝじ  
留守居役朋<sup>マ</sup>遠方に花ざかり  
俵にした箭の春惜むべし  
鹽鶴の繩をほどけば干鴻にて  
千とせの坂は分別の坂

漢家謫居の人は竹を畫て、世の中のうきふしを忘れ、馬を畫て、ころの散亂をしづめしを、雁のつてして、わが國に渡せ

子 佐 洲 几 佐 子 鶴 佐 几 洲 佐 鶴 子

る物千金にもかへずさかや。澤庵の自畫に、月や流人のたす  
け舟ありしを、きさかたにて得たる名物也。繪合の<sup>一</sup>かた  
にして、それにくらぶるもの何ならんぞ、鳥くうらぐの  
日記、昔今の一風流をさがす中に、あかつきの雲にかくれ行  
舟のあさなき波に、ながらふる者あり。鳥むろて茶を申すこ  
そ時雨哉、さ侘たる句、今更の袖の時雨さばかり捨こつて  
をしたり。

新月の鳥繪ゆかしき便かな  
畫の白髪は篠のまた生  
浮雲の鷹に塚せゝられて  
名のある團子玉だれへ入  
他屋敷へ櫓なしの舟が着次第  
なぶられものに松はさまざま  
初雪のさかな求めに鉢かつぎ  
切灯臺はこゝも四ツ限

堤 猶 專 大 曉 岩 晋 楓  
亭 即 吟 町 白 翁 子 子



つれ衆へは筆むづかしく法の聲  
 占にも見えず水の評判  
 深山木の末はもつとも御縁づく  
 内藤宿は江戸を古郷  
 世中を庄八が目にしたしか也  
 二枚ある齒の年寒き松  
 佛とは大髓よりもつつ立て  
 たばこがやむとすでに昇進  
 腰をうつ子ほどの寶あるべきか  
 かるい狐はつねに菊守  
 虹梁の菰をとかれて秋の月  
 きぬたに掛けて配り上下  
 花にこそ士農工商さくや姫  
 水から揚る山・吹は分  
 雷も呑たいそらにうるくし

昌 琴 紫 反 晋 楓 止 其 專 大 曉 岩 其 紫 琴  
 貢 風 紅 梅 子 子 水 雫 町 松 翁 雫 紅 風

何を畫けるふんどしの蚤  
 順禮の土藏に泊る暗閑と  
 河原といへば吸物を嗅  
 逆剃も夜の錦とつぶやきて  
 女もつかふおとこ人形  
 りうたんのたへまにしぼる大指の血  
 地藏を挺ツツに白楳の色  
 豆蟹の鹽辛逸ツツて月の跡  
 どこぞのはづれ仕り人  
 忍ぶにはちよつと稻荷を手傳せ  
 擲にかゝる袖のしがらみ  
 箱根路を四尺階子の行ちがひ  
 田中の驚のすぼむ傘  
<sup>ニッ</sup>をのが世を尾ひれもふらず水鮎  
 傳受づゝみを看經の隙

昌 堤 止 岩 晋 反 曉 紫 琴 止 楓 晋 專 昌 大  
 貢 亭 水 翁 子 梅 松 紅 風 水 子 子 子 貢 町



榮耀さに持あまりたる腹の張  
 しやうじの骨に京邊の畑  
 掉鹿の撫られに来る朝機嫌  
 身ひろい形できぬくの露  
 剝栗に頬を冷せば月うれし  
 鮫洲よろしき楓橋にこそ  
 よそ目には笛也けりな小脇差  
 こゝの輪乗の中に蕙冬  
 放參のひだるい顔を日なた向  
 陸地へ賽を藤岡の市  
 大釜の入あひをしる花の荒  
 彌生と見ゆる引出の夜着  
 那智黒もまツ此ごとく蜆川  
 人は何とも若衆同道  
 夢ばかり母袋へはいりし雨舍り

堤猶專 楓晋昌 大曉紫 止堤岩 琴猶專  
 亭即吟 子子貢 町松紅 水亭翁 風即吟

尾のある丸太牛房ばえ也  
 吐といふ主のゆるしも山嵐  
 踏だ男は物取でなき  
 功者なる鶏見まふ管屋かた  
 切籠のふさをしぼる蠣剝  
 宵の月産でくやしき娘とは  
 相談の場をしめぬかうろぎ  
 此側はみな鶴重のなるみがた  
 千里を行も機おりの足  
 百年の人を御扶助の雪の中  
 奉行とあるは廣い制札  
 三ッ  
 うちかへて伊豆の小山の花しきみ  
 雨の鶉籠に獺がつく  
 うすくと見ゆる盲は罪ならん  
 五人が待に三疋は來る

琴風 曉松 岩翁 止水 晋子 楓子 專吟 大町 昌貢 猶即 岩翁 楓子 晋子 止水 反梅



神無月袖にぬりゆく眉鑷子  
 菩提のみちをうたひ本より  
 冷酒がうき世の友と鳴戸繰り  
 腫物苦にせぬ目前の鬼  
 三方の底うちかへす蚊やり草  
 和尚の便宜まだ長もなし  
 から鯉に結ぶの町屋おもひ出す  
 翠丸かくしてまであられふる月  
 咲花をかねて手に入作の鞍  
 むめのしづくは三寸の相伴  
 名 うぐひすに聲の中入ほのめかし  
 鞘印籠にゆらぐ玉の緒  
 行列も杖つき坂はをのづから  
 口拍子にはのらぬ其阿他阿  
 晒ほすこしらへ雲にほととぎす

猶 昌 大 專 琴 曉 岩 猶 止 堤 大 琴 昌 楓 專  
 即 貢 町 吟 風 松 翁 即 亭 町 風 貢 子 吟

どなたか残す大鯉の首  
 六尺のまかり申せば咳氣して  
 羽織に襟かけて石摺  
 我宿の灯よその竹にあり  
 ひと夜二夜は乞食の乳  
 囊から中花へ出て峰の月  
 丁を隙日と鴈のおとづれ  
 角町のわり下水から秋よたゞ  
 あたまはづれて帯を尋ぬる  
 ヲ 奉幣使何もまいらず朝朗  
 帆にはねかへる三尺の海老  
 つれづれの爪をためたる古櫛笥  
 かたわれうつす鎗の間の富士  
 屁合に膝たてなをすばかり也  
 二六對なる北向の笹

曉 琴 昌 堤 晋 楓 猶 岩 止 曉 堤 琴 大 晋 楓  
 松 風 貢 亭 子 子 子 翁 水 松 亭 風 町 子



花鳥の改元觸て三笠山  
旅客もまじる曲水の躰

昌貢  
甘己

右卷々文類の大意をわけて引合せ、精稿すべきを、風光に犯されしかば、寒暑、心煩らはしくて、雜篇一冊に略し侍り。掌舒讀考の後、各其わたくしを、ゆるさるべきもの也。

昔紙の卷物なりしを宗祇法師、長門の國にて尋出侍りて、つらくよみ侍るに、なみだのしづくかはく時なし、とありし文義を感通せられしにや。そのまゝに外題にかきて、別に詞書をそへられたり。定家卿の御書に、宗祇の外題と代をかへながら、名物を描へたるもたぐひなかるべし。

元祿十五年 壬午

聖廟八年御忌。西行上人五百年忌。宗祇法師二百年忌。貞徳翁五十年。

霜月十五日懷舊の心をのべ侍る。

帯解も花たちばなの昔哉

晋子

かの長頭丸のすがたにて、昇殿ありし昔をいへる句也。夢想を祝し侍る會盟の事につけて、才士、文人、筆を置ざるがごとし。其名高き人の年忌に廻り合するも、風俗おとろへず、飛梅のかるく敷、云出べきにあらずと、

松梅やあがむる年も八百所

晋子

龜井戸千句奉納 發句、略之

荒木田守武獨吟誹諧千句之の奥書

右誹諧は、そのかみ獨吟千句立願ありけれど、うち紛れ、亦は成がたく過しけるも、空おそろしく、如何はせん之餘りに、御園を取べきに、一ならばもとより、二ならば誹諧の有増事にて、哀、二おりよと念じければ二おりぬ。有難さ限りなく、大かた千句は三日なれば、是はわづかに二日にもたらざらん、思ひの外になが引、夜は覺がちに催し、庚申には二百韻にて五日につどりぬ。其折ふしにや有けん。周桂かたへ、此道の式目いまだ見ず都にはいかゞと大かた尋しかば、式目は予こそ定むべけれ。定まる所を用べきのされたる返事下り合せ、さらば此度はかり心にまかせん、と所に云ならはせる俗言、私びれたる心詞、一句彷彿うつなき事のみなれど、あまたの中なれば、うすくこく打任せけり。扱はいかいとて、みだりにし笑はせんとばかりはいかゞ。花實を備へ、風流にして、しかも句正しく、さておかしくあらんやうに、と世々の好士のをしへなり。此千句はそれをもとぢめず、とく満したき一念ばかりに、春秋二句結びたる所も有ぬべし。されども正風、雅人の耳にも入まじきに、聊も聞えんははからざる幸ならんや。其上、粉骨妙句なきにしもあらず。又さしあひも時代によるべきにや、しむ



てなをさんも執心いかどなり。然れば誹諧、何にてもなき跡なしごとく、好まざる方の言種なれど、何か又世中言ならんや。本連歌に露かはるべからず、大事也。本連歌兼載このみにて、心ものび他念なきとて、長座には必ず催し、庭鳥啼かうつほになると夢を見せ、聲入に一橋をわたり、宗碩は文かよはしの自讃に、入相のかね腰にさし、宗鑑より度々發句など下し侍り。近くは宗牧一二度忘れがたく、こゝらをたよりにて思ひよる事侍る也。追加五十韵おほけれど、祇公三島にて千句二折を思ひ出る物ならし。さて古來まれなる獨吟千句成就。松の葉の正木のかつら目出度や侍らん。

これは勢州山田の住、反朱子がもとに、右の眞蹟あるを涼菟齋をして、

聊たがはず、寫し得たるまゝ也。

類柑子追悼下

鬪鷄之戲玩尙矣。季郢之芥羽金距之後。唐皇盛於此。在於傳賦韓聯杜律之彙。則是戲玩于騷壇者。而共戴籍之所見歷々焉。我朝雖未聞其權輿。堂上以及里閭。爲佳節桃園之戲玩也。又已舊而前記之所錄。可以見其概也。今茲彌生之初。公筵漱芳之餘。取題於此。延彼晋子。襟以從輩。而恢鼓俳諧。或有七步而吐五六調。或有十步而發二三曲。間有執一者。以衣既闌意始倦。而各歇搏啄。多寡混合積。壹百有冊奇。而公裁居其半。至於遣詞名字之競。變態。則所謂五百兒之羽儀森々屯其中。是所以追於佳節之典故。據於桃園之賀趣。而戲玩之。雅致者歟。逮使再煩晋子。而後偶立篇分。篇得美名。而勇快之品級。進退之點褒。判然破竹歎玉。是又可謂詠體之新奇吟房之希珍者。然非與。甲申暮春下院百之叙。

待 霄 上册

一 合 左右二字

一百の餌臼に拜め治鷄坊  
忠臣に帯のいらぬ羽音かな

冠 里  
掉 孤

五徳の冠者、羽團扇をもつて開い

類柑文集

て、東西へ、むかし玄宗皇帝、

乙の酉のさし三月三日に誕生ありしゆへ、唐土のさりをあつめ給ひて、七紳の養生たつより、やよひの餅草までに馳走奔走有。やがて桃園に峙つくりして、治鷄坊と名づ



け、五百人の童子に守らせらる。日本の鳥もその代のためしを引、今日の節會を初めて、忠臣の朝を告、閨門の夜を司さざる。一日の計は鷄鳴に有さ傳えたり。今度の行事、某仰せつけ給はりて、花鳥の心をやはらげ、列る翅七十番の勝負を記す。

几 例

- 一、五字は一日長安ノ花の花やかなる御遊にもとづきて、これを用ゆ。
- 一、三字は戴冠文、捕距武の二ツの徳をあらはして、字面を改む。
- 一、二字は越鷄の雪に散亂して、鶴筆、鷺毛のあらそひに批す。當時V形の體を用ゆべけれども

戴冠文とす。

左折歌にやはらく啄目かな

捕距武トス

左の座に着らる、事、大臣の鳥也。爪距神爽ここにすぐれたり。字義、花冠トサカ、朱冠、サカ、まこみ分んこの心なり。是を文とす。左折武門源平の威儀たり。右の座につけられて、羽翼をかひつくろふ事しかり。是を勇とす。猶、歌に和らぐとおぼめかし聞へひは、文武兼備して、太平の時を唱ふ成べし。

三 合

廣庭に風の輝尾の進み哉

乙字とす

里

甲乙の昔のやうに立かへりて、秃尖の力を合せ侍り。

- 一、生變りの假名を正し、所生の實名をこそはり、一手くの名をひろひて、珍禽、怪鳥の品を定む。申ても諸國の大寄なれば、あまりに晴がましくて、目くれ心もみだれ、旦夕鷄のうかしくしきこそばも有ぬぐし。亦く申事の御座ひ。待宵の手三十五合、をのがれの手三十五合とす。小侍従のきみ、少將の尼、いづれもほまれある方人なれば、則二卷の題號として、物加和の藏人筆さり也。

二 合

御簾まで撮なをすや花冠

百之

叡感もいざすなみや志賀の種

五字トス

風波さもに揮て、花にうち出の濱輪を廻り、にほのてり尾に、尾花なびかせたる手合、其争ひ君子の鳥にして、上下の貴賤、あれよ是よさまじろきもせず。行事心ある者にて、さくらの一枝を折て、右へかざしぬ。それより志賀之助に上こそものなし。

四 合

炭喰の聲だにたぬねらひ哉

乙字とす

十月をかねてなき身と彌生丸

乙字トス

豫讓が昔を追て、けしからぬ餌は

里

音子

里



み也。其魂此鳥に化して、雉を報へるにこそ、蜀魂のためしにならへるか。血に啼にはあらず、相手な血に鳴せたる兵也。丸は男の通稱、關のこなたの名將、鎗下の聲晩世にひびきて、其ノ月其ノ日ニ時をたがへずして信あり。

五 合

湛増が汗をしづめし羽風かな

乙字さす

介距脱て米屋へかへりしな

同

只白旗につけこの御託宣ありしか  
ごも、猶うたがひをなしまいらせて、權現の御前にて、赤白の勝負せしに、赤は一羽もかたずさかや。

何

里 蛇

其中に搗屋出の上白名乗て、七羽の中の大力、別當もこれにほれたり。

六 合

弱鳥やこゝは承仕かもらひ退

乙字

黄莖餌けふの手がらに宥しけり

同

遍照寺のけしかる法師、つみ罷出て、左を抱へて遮へたるに、衣におそれて唯はかたぬさ見えたり。日比、諸鳥を飼なづけて、恐ろしき罪つくりけるを、大雁共の筆の跡たしかなりければ、只今貰はれたりとも行末心もさなし。  
黄莖餌立られ盲さ成て後、鳥骨鷄

習 魚

里

丸製法せらるゝ事、ゆめしらすして、婦人虚弱の力さなる事、これ誰が力ぞや。只今の手柄こそ命冥加なれ。

七 合

砂渦やつよきに水を一覘

五 字

毛衣に腹黒き名を雪めけり

乙字

倭の末孫藤太郎名乗て、立白に上り、砂水にむれ入らむ鳥の羽音、先陣比類なし。右は名さへつたなくて人にもしられず。骨迄鳥武者さばかり、後口指さ、れしに、鶴の毛衣をかりて、會稽山に徘徊せしかば、忽ち其耻を雪めたり。此

晋

子 里

後、藥劑の陣に進むべからず。

八 合

扮られて毛足は松のみどり哉  
遠く蒔ヶ梅の下はむ鳥の米

左右乙字

志賀の關脇、唐崎ひまつ松たくひなし。此春は今一しほの色まさりけり。扱、此方には、風ふけば梅の下はむ庭鳥の上毛に花ぞちりかゝりける。昇殿かさなりて、御階に近く賞翫せられたる鳥窟、源の仲正の扶持すまふさひへば、松さ梅さの中よくあれかし春や昔

扶持をやる鳥がしらせけり朝の春

九 合

此首尾を狐はめなて御前負

白

里 櫻

露 沾

里



二 字

喰抜の羽實檢や路次のもと

屯

さんぐの首尾、昔男の名も汚れ  
たり。くひぬき羽、羽箭の手下  
成て、うつくしき手ぎはながら、  
やりつるせなの恨みを得たる所、  
心にかゝる負成べし。無下の瑕瑾  
にもあらずと、鳥に力を付て、も  
らひにしたり。

十 合

名乗せん三枚朱冠をみつの山

二字さす

めつた勝鬪鷄野の筋と召されけり

乙 字

鬢切左右へこきあげ、大前髪つか

志 水

みたてたる有様、三まいさかの見  
参さ也。三番うって三の山と名乗、  
角あるもの、角、牙あるもの、牙  
見事く。爰に鬪鷄野のあら手を  
入たり。つげの小櫛もさす來に  
けりさなん、津國のつけ野は、昔、  
黒主鹿をゆめ見しより、夢野と名  
付、古意たゞ鬪鷄さいふ事に取合  
たり。一作小錐目に見ゆ。

十一 合

跨ぐらへ薩摩におゐて扇かな

左右乙字

入首へ胡椒頭巾の羽風さぞ

小勝くゞりの手者、汝は一人の勝  
夫さほめたり。破れかぶれの時に、  
破楚の太元帥と記されたるそれが  
弟子也。爪立より内股へうつて、  
扇をたびぬ。

百 猿

里

扇長ケの大兵、琉球の後胤薩摩守  
我有さいふは、隠岐の小島の荒者  
也。頭燃りの上手、つゝさ入所を  
はれかへしたり。花々しき胡椒軍  
かな。

十二 合

裁つけの足に覽悟や錐囊

乙字さす

取放し佐野にはいくつ合せ膝

捕距武トス

たちつけの躰、田舎行事さみえた  
り。芦さ足さのせりあひ、六かし  
き手を云ほごきぬ。右も又入くみ  
たる手也。佐野領舟橋より出て、  
牒面に合せ、その數極まり侍るに、  
いづくへか取逃したりと申す。そ  
も鳥は無シ亦取離しこの兩用を、

類柑文集

辰 下

里

今あらたにさり放したるは、うせ  
もの、沙汰にして、吟味す可き事  
ながら、歌の心も改まりて珍し、  
さ仰せありて、御褒美、ここに、一  
扇をたびぬ。

十三 合

音をはかる東合や羽衣の曲

柳が瀬をつかみ合せし鳴尾かな

左右二字

吾妻合の曲流、音をはかるこの手  
寄、ひるがへす羽風に目ごまし事、  
彼支宗のたはふれには、以てまい  
つた合せものなり。兩岸の柳のみ  
さり、東のかた屋、西の片屋、遅  
速同じからず。其羽、其尾ともに  
風流陣。

右

此 里



十四合 左 二字

刻ッて入くるみ花冠も箕手哉  
距筋の子は子也けり小蜃  
山がらの廻すひれりを得手物、箕  
手にかゝる砂はらひ、たまるべか  
らすきて、しやつに煮かふものな  
し。もてあつかへる手心にこそ、  
其せがれ鴨雛の奇をあらはし、汐  
干の小貝をわる拳にのせて腸のこ  
さし。花冠は唐干の米ほご。

晋 子  
雪 花

十五合

角もじや三年爪の弱くるま  
とりむすぶ植毛の爪や要石  
乙 字

唄 言  
焉 子

爪にいの字をかけて進み出たるに、  
力定らずして膝車さみえたり。年  
の功猶々執行すべし。かなめ石四  
結を取て、ちつさも動かす。神の  
力のあらん程はさ荒言尤。

十六合

支毛なく漆ぬりけん惣まくり  
乙字さす

雪 花

油符を鯛合せとぞ惠比次抱

里

半面美人印

大黒屋の塗桶さいへば大津に隠な  
し。かれは投るま口を明ゆへ也。  
大坂に濡髪、いづれも支毛なき若  
鳥也。爲家卿の歌に、紅のなのが身  
に似ぬうるしの木ぬるさしぐれに  
何かはくらん。背太をあざむくべ

十八合

からたちの嵐はやがて距かな  
二字さす  
琉球の獅子に油や染ほだん  
乙 字

立 朝  
里

十七合

大鋸の血は涿鹿よ戸板楯  
須田町は茶虫ばかりや古戰場  
左右二字  
たくろくの野、古戰場を賦して、  
市間に戸を負ヒ、巷に菜屑を掃。  
其代の窮鳥は寒夜の鼎に煮られ、  
今の世の鬪鷄は、温光の庭に肥た  
り。むべ持さす。

每 閑  
里

十九合

歸國の御土産さして、高麗の來鷄  
のたれ、十つと十をかされしより、  
村里に時を報じて、御調の道たえ  
ず。其中にも牛さいはる、は唐獅  
子也。羽毛を膏かためにして、黒牡  
丹さも申べし。これ敵の鐵袴をす  
べらかにし、剛啄の力をうば、ん  
さの計ごさ、専らこゝろを盡しけ  
れども、からたちのあらしにけな  
され侍り。



左右捕距武さす

まくり距や同じ枕に十三羽  
手塚めにつるむ所を二けづめ

形容、背術、飛鳥のかげりの手を  
くだかれたり。かの小男さいへば、  
今更名のらすさも一の筆に記す。

右は雌雄の中よきかたらひをへだ  
てられし無念は、今にありき聞ゆ。

鳥も心なうごかして、物に感ずる  
所、時にさつてのりん氣距せしに  
大事に成て、はげしきた、かひ也

けり。さてこそ紅葉々を分つ、行  
ばさ、龍田山の錦、羽をひるがへ  
して、名は末代に有明の一番鷄さ  
記せり。

廿 合 左右二字

負関に逆櫓たてんと切戸引

素里

風流を勝大振羽の黄彩雌

箭管の景関が髪先をあらそふ一二  
のかけ、二番鷄と評定し侍り。二  
字チ云

勝浦の目出度名より、櫻間が陣も  
距ちらされぬ。その、ち十八九計  
なる女房の、大ふり羽をひるがへ  
して、陸の與一を招きしよそほひ  
此扇を射たりし事、舟ばたをた、  
いてほめもの也。

廿一 合

鬘毛や兀ものゝしる雲の鬘

乙字さす

目包のいじれもかくや羽音笠

二字さす

今日ぞわがせこ、花かつらせよ、さ

洞滴

里

欣以

たしなみ出たる中に、朱冠兀グシ

たる老すまふの雲の鬘さは仰山也。

くれぬさもはや鳥屋出しの簪鷹を

一よりいかゞ合せざるべき、小侍

従、此目包みもす、さき雄なれば、

心のはやり出をしづめんさの事に

や。笠を敲いて羽おさをかり、陣

中にきはせ侍る一ツの計也。

廿二 合

尾を栽ル掌心かへせ初合せ

五 字

進む氣の鐺子にメる板尾也

乙 字

二神の昔、あなうれしき人につた  
へ給ひしより、鶴鶴、靈鳥也と重  
稱せらる。雄々雌々いまだ交合比

朴芝里

羽さけびやかれも出たつ菖蒲草

五字さす 右二字

水白も紅の鹿子のくるひかな

先 年

言 志

里



白鷄の碁石に成ぬ菊のつゆ  
此らみ玳群なれば、碁石をば御  
ゆるし有。倍、黒毛に白のさしも  
のは珍らしき武者也。なのれが胃  
へるさま、さうぶ草に似たり。今  
よりして八幡黒名乗て、勝負す  
べしこの下知に付侍りぬ。水白は  
味方の交り毛ながら、紅くどる色  
みえたり。右に付べし引分たり。  
羽叫遠鳴りして、面にむかふもの  
なし。

晋 子

愛一身にありき、六宮にならぶ鳥  
なき美毛、一六のあらそひに氣を  
呑み目を睨つて、轉あひ、かさな  
りあひ、飛揚反動、心を碎きもみ  
篋の手づめを見ゆ。  
田舎はにふのかた屋に於て、骨な  
き蚶力なき、蛙歩食雜漏を喰つて  
羽虫にやつれ、毛生見苦敷牛房鷄、  
目引、鼻引、笑ひ草なりけん。花  
のあたりの鼻こそ。

廿四合

六宮の碁にあづかる毛色哉  
地下の寄蜩の糧を包みけり

右 此  
百 之

目啄を當に仕かへせ權五郎

里

左二字 右乙字

鸚鵡局中に飛入て、双六の道を崩  
したるためし、開元の遺事也。竊

揮距武さす

景清がくろぶしや此壯けづめ

唄 言

乙字さす

當は正當三月三日と聞ゆ。其箭、

三日三夜もつて廻りしは、くりこ  
さながら、厨川のつはもの鳥の海  
さ名にあふ大鳥に合せて高名した  
り。何某も平家の家鷄清きて、翅  
を双べし兵、老の驚の泪にくれて、  
昔忘れぬ手柄咄、此春こそにくや  
しからめ。

廿六合

分られて櫻をつゝくあまり哉

幽 調

右 屯

捕へ役われは雉いぞ二けあひ  
行事、風呂屋の北屋はげしき手合  
を分けて曰々、左近の陣に鬚を鳴  
し、羽を揮て撫られたる近衛ごの  
の糸櫻これ也。橋のかげむむ道に  
かくれかれて、尻ごみせし雉さは、

廿七合

炭桶へあへて物なし團炭朱冠  
箭利の弓手へまはる地すり哉

笹 分  
雪 花

左乙字 右二字トス

たごんさいふも一名にして、神事  
法樂、勸進の手取、元來在郷すま  
ひなり。地摺は敵をうはそりにか  
まへて、息次の功者也ければ、し  
ばしこらへす尻しさりして、物  
なく炭部屋へ逃たり。しばし扇い  
で一枚の禮物。

廿八合



伽昆且の爪に荆軻が事もしれ

乙字ミナ

バアカとて初め笑ひし鳥は物

五字感長

天上の麒麟、人中の鳳凰さいふは、  
俊傑の高才をさす也。カピタンめ  
さうたはる、俚侶のたはぶれ尤哉。  
爪に荆軻が力ヲをふくんで、敵陣  
にむかふさいへども、つるに本意  
をさげずしてハッ割にさかれ、南  
蠻料理もうれうさなりぬ。バアカ  
文字なし。馬鹿を聞ゆるひびきな  
りければ、はじめ笑はれしもこ  
はり哉。距爪に御簾の釣手に似て、  
上へついて反たり。起テ舞ヒ不調  
法にて力なげに見えしに、唐角力  
の手ごり、我國の鳥はものかは、

百之

里

此鳥は逸物也さて、欄干ゆるくは  
かりどつさいはる。

廿九合

宵啼や名をも雲井に二日月

戴冠文ミナ 右屯

尾をつゝく虎や栖らん東天光

每閑

里

すこし目にかけてたる月の一聲は、  
雲の外の雁、雨の中の鶴を射たり  
し高名をしたひて、明日の心がけ  
を聞えたり。本歌さりても双びな  
き上、時鳥にもまさりたりさて感  
ぜられし。

いまだ明ざるに、勢をもよほすは  
、やり雄也。虎を養なふのうれへ  
を用心して、高聲目ざましく聞え  
たれども、右は膝をつき、左の袖  
にすがり侍り。

三十合

食に計冠者が世話なり鶴にくだ

二字ミナ

古塙の奈良にけやけし装束毛

乙字トス

鼻さりすまふには、太郎くはじや  
を投てしたりがほ也。鳥飼へも是  
に思合てちつとも油断なくや。字  
彙 翁字ノ註ニ、翁は鳥の頸毛ナ  
リ。亦鶴字ノ註ニ、本ハ翁ノ字也、後  
ニ頁ヲ加フ。さみえたり。はつき  
りさして鳥のエリモトさよむべし。  
比國にてくだなかけたたるは、神代  
よりのごうぞく、いつにすぐれて  
花やかならめ。古塙の毛ふるびた  
る出立はえなかるべし。廣中へは  
いかど、大衆ごもの平家をおごる

里

白櫻

卅一合 左右乙字

毛車の力なき身や籠屯ぬ

御最負や艾がもとの鶏の毒

朮月

里

毛車の前後にはつさよりて、物の  
手もなく喰ふせ、籠たまぬしける  
を車論ひさ名付たり。是は待宵方  
の上臈の手より出されたる忍び音  
の鳥也。時めく御方には恨のこる  
べし。亦身にそへて思しめさる、  
羽利、是大切のおすまふなれば、  
よもぎがもこへのつかひ、さるこ  
さぞかし。左右勝負なし。

三十二合



切、聲や背を三ッ伏せのいきり物

洞 滴

老鳥のけふ若やぎぬ固本丹

晋 子

左右二字

しゃくり出せ手々中矮鶏をされかつら

里

三ッ伏のわつは、手々中の玉かつ

らさもいふべき利口の手合、針穴

兎毫の争ひ、精神をこらしむ。是

等座敷すまふの随一さす。三ッ指

をあぐれば、七尺の屏風に躍り、片

手にのすれば、四面の楚歌に舞こ

も申すべし。手々中、或鳥の曰、手

々打さいふ説もあり。面白し、しゃ

くり出たる手を打返すこならば、

小腕の勝負にして、チマボ共のは

しかき筋にや。狂作さもあるべき

事也。

三十三合 左右乙字

啄かれて十日坊主や桃がくれ

里

朝鮮國に沙門あり。形ちんまりさして、小ざかしきを人皆鶏僧と云り。吾妻にも編三左衛門が歌、南京吉兵衛が踊の風流も、其形似たる故なり。今此十日坊時にあへるもの也けり。かたへの老さり、資朝卿にたうさくおもはれ侍る嘲り忍びかたし。さればさて世の思ひ出に、辻こりしてあそばんさて、伏見、木幡の瘦鳥、閑居竹林のねほれ鳥時しらす、巢守子の親疊好キ猫悪ひ迄呼揃へて、其日の遊興を催しけり。仙源の水に若やぎ、白頭を彼薬に染て、樂み窮りなし。

卅四合

左文武共ニ三字

大玉子源平香のわれもかな

義の端の萌る思ひを鷺より

酒ヲ般若湯、鷄ヲ鐵鑊菜さいひか

へては、出家のかくし喰するを、

東坡居士慥に見さがめし也。長薯

は鰻、なごり子は鱧、鐵炮は河鯰、

照手もしらぬ唐名也。大玉子とは

近來の異名にして、まこは親仁

也。香の策相印さし、われからの

相詞にて、源平みだれ鳥に成ぬ。

さればひよこふまるれども、母鳥

かへり見す。是を義さす。親しめ

らるれども、ひよ子のしらぬこそ

哀なれ。既に夕陽西に成ぬ。ある

ひはうつぱりへ投上ゲ、或は藏の

内へ仕まはれて、犬道、鼠の穴を

ふせぎ、後日の軍をまつさかや。

此番はむべ持さすべし。

習 魚 里

三十五合

南無八符尾筒を守れ花も今

勝足をひたさば關の清水かな

源氏十羽を出せば、平家も十羽も

出し、源氏三十五をすぐれて、こ

なたも卅五羽を合せけり。

晋 子 里



晋子終焉記

李白、鯨に乗て、汗漫の風にあそびしは、醉中に水中の月をとつて、豪放の氣を残すものなり。いまや晋子三年の病根、なを誹情に富で新をあらはし、奇をはき、頤をとき、人口に膾炙する句々みなしる所也。ことし二月三十日、はからずもよとの泉にかへる。倦情よる事なく、夢のうちのゆめのごとし。まさに誹灯の光をうしなふ。余、多年莫逆のちなみをなす。この月廿三日、寶晋齊に膝をいだし、兩吟もよほしけるに、

春暖閑爐に坐の吟きて

鶯の曉寒しきりくす

其角

筧の野老髭むすぶ儘

若草に普請の御説成やらん

青同流

浅黄しらべの句ひかくれて

月も経ぬひかり拵へはづかしき

同流角

風のうけたる留の番よぶ

鴈の道大草臥に立やらで

泪さまく剃はそつたが

流角

こりすまのまた水にあふ九條島

角

一席亥の刻に、晋子ねぶたきけしきにてわかれぬ。これぞ生前おさめの吟なり。いま思ひあはすれば、春興に、かなしひかな秋の氣を感じ、末の句に龍溪禪師の九條島の水難に、身まかりたまひし水中の天の一句、古今符節の愁をつなく。屋梁落月のひかり、さらに石友の契りを思ひ出して、こゝにしろすものなり。

青流

追悼之句聯

不分次第如左

はせを翁は普化の師、晋子は臨濟の怨子、三十年來、八面にから竿をならして、他のつらを出せるなし。末期に及で半句を吐す、さらに遺跡を止メざるは、若夫それもしらず、大悲院へ齋喰に行歟。

中陰廻向

普化去りぬ句ひ残りて花の雲

嵐雪

亡跡

菜の花や坊が灰まく果はみな

三七日

鶯や弓にとまりて法の聲

類相文集



墓 參

山ぶきの實を穴堀の鉢ひとつ  
齋をまふく

櫛賣あなうの食を見る  
川骨や撥に凋る夜半樂  
經の偈は連歌ときぬほととぎす

かの除夜の鳴門のさはがしをも、ほごなく世は春なれや、

さ紅裏四天王の吟、今さら思ひ出て、

泪かな左の耳はよぶことり  
ない事の袖に残るや朧月  
行空にこれも其角が鴈字かな  
世の中をざれ繪ざつとの櫻かな  
初花の的はかけたたり都から  
たんぼゝや終に<sup>ヘチマ</sup>馬の皮さえも  
陽炎や香土器の土あそび

露 沾 古 竹 沾 桃 神 周  
沾 洲 苞 德 隣 叔 竹

のぞむ時歸らぬ影や花の株

この坊、かの琴花印の下榭につれけるや。

琴とれば起ふし柳三たび迄  
梅さくらちればぞ人もよぶこ鳥  
俳諧の力おとしや鹿の角

風流をたてぬきの飛花を惜む。

今もいま錦繡の人よぶこ鳥  
花曇りかはらけすへて伽羅一炷  
花見るや槐安國のさきの國  
風跡のまぼろしもがないかのぼり

孤芳を採る

おしいかな梅をおもへば一指頭  
その鹿の角落こぼす泪かな  
碎けたり黄鶴樓も麴の殻  
苗代に口漱しをゆく水に

百 仙 白 濟  
里 化 雲 通

立 格 秋 枳 千 朝 序 專  
永 枝 航 風 山 叟 令 吟



かうばしき骨や新茶の雲の色  
春雨に綱が噂のなみだかな  
花鳥にこいよと呼もうつゝ哉  
蕨にもおる雫あり昔沙汰

あるきながらさいふも夢になりて

ちる花もとの雫や小盃  
鶯を中の主や假もがり  
あさつきを洗はでぞ行日は三十日  
文かきの夢は破れて土筆  
いつ歸る空の名残をいかのぼり  
花鳥の泣盡しては眠かな  
花の吟扇の端もさがしけり  
かへる鴈雲のいづくに片便宜  
珠數をもみさて居眠るや梨の花  
雨なみだ君がためなり千里鶯

巴人 我常 千泉 同波 千江 甫盛 新眞 爲桂 功悠 受松 石雲 芝筵 仙芝 指馬

今はなし咲來る花も無念なり

茶に耽りて師にたがふをうらむ。

別干東武。別後其角不ニ相見三年。今載三月青流之寄ニ汗簡。而傳ニ角亡。生別猶快々。死別復如何。嗚呼角獨歩誹名在。惜。其有器不展齋志以没鬱ニ々郊原。傷此。

草の芽を何ぞ探らすや鹿の門  
さても世を鶯にのる花の塵  
春雨や匪の中から虚栗  
雪霜の翅かはくやかへる鴈  
瀧壺を飛さる鯉ぞ花のひれ  
其文字は風にも折られず花の角  
田舎にまかり、晋子身まかり給ふもしらすして、三月末つ  
かた江府に歸り、升堂のしたしみにたへず。  
股引て立かなしむや遅ざくら  
なを夢の二月卅日を死時分

渭北

大才 阪 甘泉 臥磨 風磨 花睡 三 惟

貞佐 昌貢



難留の透をちりゆく葦かな  
 その時よやつこ豆腐も春の夢  
 歸る鴈うき世の關を何となく  
 申まい酒の異見を花の靈  
 なき人の筆にとならば夕雲雀  
 その角を落して鹿も哀なり  
 山は鐘海は燃つゝ鴈の跡  
 石印やさらに名を彫る花密  
 寂光に居形にゐるぞ桃の花  
 しほれ草松じやと人をだまされず  
 水くきにもぢ摺迄を土筆かな  
 きれ紙鳶のをはりみだれぬ法の雨  
 アサのないよみやうつらん春の夢  
 七尺は蛙も墓のこなたかな  
 年ごろ菜つみ水くみたるかしづきもなく、師恩をいたゞく、

菜花 在長 文竿 寒玉 到李 常和 羽光 兔株 是橘 峇柳 省示 志鐵 嵐水 其裔

ちからなき薄刃の脂や落蔵

來爾

此所に年久しく住馴れば、さゞまらぬ水に鐵の渡守も袖  
 をひたし、竿の力ながらに、

頼まれぬ島の引かな二月盡  
 隈刷毛の春もむかしの雨戸かな  
 挑灯や山吹きえてわたり川  
 留主遣ふ寝姿もなし花の闇  
 青柳や沙汰と違しほつき折  
 鹿の角に鎗を見せたる別かな  
 泪の手漸くはなす田螺かな  
 曾子の羊裘もあり。  
 いへばえに水梅干を春の土  
 蘇井ならで手切や花の掛蔓  
 みづくきの梅は開ど口や夢

白櫻 毎閑 右此 立朝 百猿 焉子 欣以 百之 習魚 志水

晋子が琴に物かくにじめさ一させの春風して、よの風雅のう



るはしきいくばくぞや。ここに限ある悲しき春にあへるを、

初ざくら哀に遅し琴の鉦  
際付の躑躅をはづす袂かな  
蛤の鏝も名のみや汐干山  
空家のもぬけ燕や袖の雨  
その人の夢路も花の明りかな  
土の黄な蝶に手向や花の露  
明日田鶴のあすも春なし袖の月  
迷ひ子の泣手に餘るさくら哉  
月か花かけふは臙の塚の水  
一寝入してから哀れ春の雨

また浪花の状をひらく。

紀念ぞと聞や東風ふく松の音  
涅槃から十五日めにキ角也

忘れがたみに嬰子を殘し、其あたり思ひやられて、

雪 月 洞 花 向 下 漁 滴  
女 辰 分 口 道 尾 東  
籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠  
鳥 掃 里 里 里 里 里  
鳥 掃 里 里 里 里 里

大 北 阪 岸  
紫 方

おもがけの似たもやあると雛の中  
この後はたれを相手ぞ露の蓋  
白桃のいつを昔とおもひしに  
諸白に苦みつきけの江戸ざくら  
聞事が泪になりてはるの雨

金鐵の圍をなしても、遁るゝに所なきは、さだまらぬ世さら  
にいふべくもあらず。只その人なしたふ物から、武江に於て  
は晋其角、それ程ならぬ年より道に生つき、高名を殘し、こ  
さしの花に先だちぬるよし。惜むべし。誹因の淺からぬ  
を知て、稻津氏のもさへ、せめてに申つかはしける。

霞けり消けり富士の片相手  
清新俊逸にあらずば、死さも休せずさいふ、その心のすぢ  
をひくは、この人にあらずしてたぞや。

他の耳を驚かす句も花の音

霜の鶴土に蒲團もかけられす。さ、子を悲しみし人も共に流

文 十 車 庸 芙 雀 美 記 雷 宮 新 嵐 水

大 來 坂 山

青 流



水むなし。

親も子も同じふとんや別れ霜

秋色

晋子が名は新羅を過侍るに、近き比の判にあまた涉川さしるす。いま思ひあはするにわたり川さよめり。畢竟廣漠野の牛

を愛して、廊庵が同鞭をやすめん因縁なるべし。

無何有の裙とる胡蝶わたり川

沾洲

寶永元 甲申 文月十八日のあしたをしるす。

我菴も 勢田の時雨の刷毛序

是はいつしかの御句奉るを、切字なほ覺つかなかや。其韵要をさとし、古歌に例ある事ども引出したらば、御ゆめ心にもかなひ侍るべしとや。一つの解作を出して、御不審をいらへ奉ることむかしの夢説にせよ、こはえとかじと隠言して、先、不測玄妙の姿にたとへていはく、

我庵と作しき家居、

すめばかくうさのみまさる世をしらで

あれたる庭につもるはつ雪

せたの時雨とは、

露時雨もる山とほく過ぎつゝ

夕日のわたる瀬田の長はし

この國の瀟湘、西湖を、心裏にそなへ給へる精工いはんかたなし。刷毛序せよ、かつ、はけつゝにやらんと自問自答のさかひ、有心、無爲の轉輪精神畫得無聲の風景をたゝへて、夢のうきはしとたへせず。睡中現然たる御句の却々、石山の石の心にこり、水うみの水相に歡喜して、菅神無準兩聖の交感、ことさらに自現示の誓ひを、このあけぼのにしらる。

右端想圓のこと葉、侍坐の時、御返答申上たるを、愚意尤はばかる所なしとて、

かさねて草稿を仰かうむりければ、つたなき筆を揮ひ侍る身。

晋 其 角

一朝の夢解たりしぬしも、はやく夢中の客こなつて、風輪に清香を起し、水相に月をゆりすへ、枕の下の有明も自由を辯じ、自在を述。かの夢裏の雜談をさめて、したひて一句を投す。



花の雨胸は板間を裂夜かな  
 梅黒しとて母を召るる  
 蠶には言葉おろさず懇に  
 眞はついと通るすく道  
 冷汗はさつぱりとして雲もなし  
 かうかまえたる筆匂ふ也  
 行月にこの松傘をさしかけて  
 平沙に並ぶ鳥は足輕  
 釋迦頭鐺二寸は秋の肌  
 いざとぞやせし拜領の樽  
 河骨の花繕ひに腮上て  
 伽羅の後に灰汗の音聞  
 旅衣おもひ初しかわすれたり  
 妙なうき名でこそはあんなれ

冠 秋 嵐 枳 岩 青 千 大 山 一 朝 序 百 白  
 里 色 雪 風 翁 流 山 町 雀 叟 令 里 雲

俎板に土は残りて雪の暮  
 是なくんばと三上の吟  
 取あへず手向になして草いちご  
 涼しき水に浮し鱗  
 なつかしう蟬の餘りに笛有て  
 けふは静も御奉書に逢  
 明月に寝ぬ合點にて夢もなし  
 醉をふかるゝ軒の露霜  
 雲の端や藜の杖に草鞋がけ  
 佛につなぐ畫中の鳥  
 川筋の音になり行鬻こき  
 塗笠を着て霰よろしき  
 紅顔も白井峠の吹をろし  
 鏝の鳴日はまつも待うき  
 春の雪好ナ所へふりにけり

風 我 周 仙 立 立 桃 指 沾 濟 菜 寒 文 到 仙  
 葉 常 竹 化 永 朝 隣 馬 洲 通 花 玉 竿 李 芝



五山いづれも大釜に蝶  
借銀を二月に延す雲無心  
骨屋が撫て通る關札  
全跡はどれから出て皿の汗  
名のなき蔓御前に懸  
左へは神代の月の飛鳥道  
壹分をなめて戻す身の秋  
むら萩に今も大万三ツ瓶子  
四角ナ人に北州を見る  
橋の宵袋さげたる三輪の曲  
てれめんていこ鱈ともなる  
通にてとるてふいまは時鳥  
すべらぬやうに石白をふむ  
鼻紙のとにかくにまた一雫  
博奕の異見束帯で來る

甫盛 兔株 同波 沾德 執筆 青流 嵐雪 濟通 立永 序令 沾洲 白雲 周竹 枳風 沾德

まかなくに夫婦ぶつゝ何を種  
秋も名残の鬢水へ蠅  
連雀の紫そめに下るらん  
伊丹の土藏月の駒引  
眞那箸にかけてぞ思ふ花の波  
雛のひとりはとり残しなり  
三  
出替りに言葉の市は中の口  
寝ぬに明たる腹の鹽梅  
けふも又廬山の連衆アサをぎむ  
膳所の新茶に千木の逼迫  
鯉はねて綻びきらす一あらし  
けさも干かぬる壁に脉あり  
饅頭の田舎へとよく日は十日  
なむあみ右衛門世間かしこき  
大筆も借れて龍の勢ひぞ

秋色 風葉 甫盛 仙芝 周竹 百里 立朝 桃隣 指馬 文竿 同波 沾德 寒玉 青流 到李



思ふ方へと投る 鷓鴣班  
 塵ほども伊達はまじらぬ 葵の日  
 眞田を結ぶ 指に入月  
 淋しいをめぐらしがらせ給ふ 秋  
 霧ほのくと居風 呂の經  
 面白<sup>三ッ</sup>い如來の宿を寺といふ  
 車道なき 鶴の滯留  
 配當で一代なれど日に向ふ  
 印判ほどに 蕪は煤けて  
 いへばえに内亂の禮も 蟻通  
 百合の光に 手拭をとる  
 肩衣を着替置たる 松の枝  
 九軒の首尾は念に念入ル  
 金耳の落てはいとと片思ひ  
 月をも汲は 井戸替の櫛

指馬 桃隣 序令 立永 立朝 白雲 風葉 嵐雪 仙化 沾洲 周竹 枳風 桃隣 沾德 濟通

ぼた餅はたど二いろに露ぞ置  
 手摺をすべる角力見えたり  
 洛外に花を持たが病なり  
 つぼ菫にてかれが 高名  
 鹽竈のどちら霞や夕日影  
 酢和の濁り山はこさらぬ  
 前垂にまだ鳥虫の額つき  
 革蒲團には引舟の坐ス  
 兄の成二寸延なばひたち帯  
 ふんどしをせぬ時代かしこき  
 針見せに座頭のゐるはいつからぞ  
 むすぼゝれてもかける 芝海老  
 一面に舩かく間をたち別れ  
 合羽は縛る物とたはれて  
 八町はよるもさはるも油筒

秋色 格枝 桃隣 寒玉 秋航 眞佐 青流 沾洲 仙芝 秋色 濟通 寒玉 文竿 沾德 貞佐



太鼓のかしら芥子に打込  
 白糰子の狐の顔に月ぞ照ル  
 祇園の南嗟峨の北秋  
 蛸賣に蛸好家の露散て  
 門弟共のやう植ぬ櫛  
 山姥はとかく踰躑と思はるゝ  
 鼻かみ捨て瀧も汚れず  
 雪の日の妙なる文字は五升樽  
 淨るりに金入て聞世も  
 住吉の矢見の姿も花の夢  
 柳のはらみ賜はさびしき

右百韻四月十八日、深川泉龍院にして七七日之追善、各満坐。

百ヶ日

蓮に赦は百日の鯉をこたらず

到李 格枝 同波 沾德 文竿 秋色 青流 眞佐 仙芝 沾洲 寒玉

冠里

編集の昔を夏中に思ひ出で

移りゆく人や花つみ終りの日  
 日々にもろ手あはせて百合の花  
 石に箔百日願ひて蓮かな  
 今日施僧即事  
 麥食に人も匂ひも猿すべり

沾洲 秋色 甫盛 青流



跋

狂而堂其角、氏は寶井、行年四十七才にして世をはやうしぬ。なきがらを二本榎上行寺に送りて、夜臺をなす知友、門人、石碑を建む事をのぞむ。然りといへども、宗法有とて本意のごとくゆるさず。これによりて深川長慶寺に、芭蕉翁の塚あり。それ隣りて、一ヶの土饅頭をきづく。晋子病床に、無眼の達摩の像一紙を書残せり。廓然不動の因縁にやと心ざしをはかりて、すなはち和尙、開眼の筆を點じて、この佳城の下におさめたり。おのゝすごき夕暮目前にさら也。又この三卷は、晋子多年席をかさね、あるひは耳底にとどまる新話をつゞり、秋葉の五味を嚙で類柑子と名づく。しかれども、全篇おはらざる中に病おもくなりて、つゝに空齋のかたみとなりぬ。嵐雪、枳風、沾洲、清流とひよりて、かれこれの反古とりあつめ、外へは散さじとやうく一箱におさむ。されどつとふべき一子もなく、門弟またまちくも也。秋色といふもの、女ながらも久しく笈を負ふ心ざしあり。また忌日、祥月の志をはこび、いとなくものしたり。まことに晋子、日にねり月に練の功ありて、卷々の艶麗錦を織なし、英を咀き花をかむ句々の清新、氷にいさぎよく、眞に常世の一珍藏なり。むげに紙魚のすみかにはてんもほいなして、前後くりあはせ、つゞり校へ一集となりぬ。千山、朝叟その外連中もよほし、末卷に追悼の句をつらねて、吉田氏が乞にまかせて、これを梓にちりばめて、この誹道を文車にするものなり。これを人につたへ、これを世につたへ、是を悠久に達して、斷續の清音にかなふ事しかり。

丁亥冬季上浣

箕影堂	沾洲
菊后亭	秋色
阿桑門	清流

江戸日本橋通三丁目

吉文字屋次郎兵衛版



五

元

集

共角句集

旨

原

編



五元集元の巻

長慶集、元亨釋書なごきこえしは、集編なりたるそのさしの號を、やがて名さなむせられたり。これは延寶にはじまりて寶永に終る。その間、五元をあらためたるが故なりかし。しかるに晋子の滅後にいたつて、たれ人の家でありともしられずして有しも、正徳より今延亨までにこれも又、五元を経たり。されどその名の久しくきこえて、此集の世にかくれたる事や。こゝに國ゆすりてたうさみ奉るおほん神につかふ大徳の在けり。古代の物このみて、多くあつてもたれし中に此書も、さし比ありけるが、たぐひなき寶さめでものし、ぬりごめのうちにふかくひめ、心の注連もゆひかけつゝ、御垣をまもる宮奴の杉の嵐にねぶるなもいかにうしろめたくやおもはれけん。さればをのづから案内しりたる道のすきものごもは、縁を求めて見ん事をこふめるに、大徳うけざるさまにて、むれつゝ人のくるのみぞと、つぶやきながら、せりいでゝも、席をかへて見ることをだにいこはるれば、半紙もうつし得るやうなし。人みな月のうちの、かつらのごさきをうちみあへり。予も、もこよりこれを得て、先師の妙を明らめしらんさつれにおもひて、さしをかされき。まこさや、この比つたへて持たる人をきくに、予がよくしりたるものなりければはじめよりねがひしこをかりて、乞もさむるにゆるさず。されど彼家にゆき、する事、度をかされ、かつなげきかつらみて、衣通姫の庭に、七日までたちさらざりし者のごさき、こゝろざしにやめでたりけん。からうじてあたへたり。よろこびまるびもてかへり見るに、みのゝ紙を中よりおり、かりそめに草稿のやうに、なしたる本の遺墨八十八を一冊させるものにて、晋子の手澤、今ななうごくがごさし。うれしくも、したはしくも、あはれにも、めづらしくも、まぼろしのかんざしを得てかへりしこゝちも、かくやまおもふもあまり成べし。今は、はじめよりのほゐたがへじと、櫃におさめてかくすこさなく、龜成さいふが

筆をかつて、氷の下なる魚を畫くがごさく、一點をたがへずうつして粹行し、世に晋子をしたへる人さ、こゝろざしをおなじうし侍り也。

百萬坊旨原



五元集

延實。天和。  
貞享。元祿。  
寶永。

寶晉齋は米元章が硯の裏に鐫入たる號也。三弄子、其硯を予にあたへて、寶井晋子といへば、此號宜しくかなへりとして、筆事ことに述給へるを、やがて佐玄龍が額を需て、雪月の軒葉にかけたり。延實のはじめ桃青門に入しより、寶永の万々歳をよぶといへることぶきしかり。

其角

春の部

四十の賀し給へる家にて

御祕藏に墨を摺せて梅見哉

遊大音寺

んめがかや乞食の家も覗かるゝ

加州小松觀音寺奉納

梅の花旦那を待て庭にあり

芭蕉翁の沙彌、かけものほしが

りて、繪讀をかけるに、

せめてもの貧乏柿にんめの花

曉

進上に闇をかねてやむめの花

不曲亭

あぜを越目あても梅の句哉

こつとりと風のやむ夜は藪の梅

五元集

なつかしき枝のさけ目や梅の花

宰府奉納

守梅の遊びわざ也野老賣

和心水推敲之句

たゞく時よき月みたり梅の門

梅津氏の祖父、大坂表の軍功

によりて御感狀、御太刀を頂戴

せらる。正月十七日の朝さかや、

佐竹、上杉、蜂須賀等の家臣十

七人さ也。家の風、相つたえて

今も正月十七日、鏡開の興行あ

り。其響、家督執權として此春

の賀會有。

幡持を文臺脇やむめの花

元日、眞珠喰あてし人の、句を

視へさいふに、  
三五七



夜光る梅のつぼみや貝の玉

仙石壹岐守ごの、正月五日に身

まかり給ひぬ。玉美公に御悔申

上侍るこて、

外様迄手向の梅を拜みけり

元祿十四年二月廿五日。聖廟八

百齡御年忌。於龜戸御社。詩歌

連誹令興行一座。

梅松やあがむる數も八百所

氷肌玉骨さかや

昔見し花にも香にも梅の皮

久松蕭山亭にて

梅寒く愛宕の星の匂かな

百八のかねて迷や闇のんめ

芭蕉庵をさひて

鶯や十日過ても同じんめ

うぐひすの藥教ん聲のあや

腕押のわれならなくに梅の花

箒木のゐくひは是にやみの梅

鶯の身を逆にはつねかな(止立隅)

うぐひすよいで物みせん杉鉢

茶臼にさまりたる繪に

鶯や氷らぬ聲をあさ日山

茶臼にさまりたる繪に

うぐひすの曲たる枝を削けん

鶯に罷出たよひきがへる

うぐひすや遠路ながら禮返し

市隅

竹と見て鶯來たり竹虎落

雀子やあかり障子の笹の影

(さびあがり  
しやうし  
いふらん)

來ませるの申繼とや見えつらん

十一日

お汗粉を還城樂のたもと哉

景清が世帯みせぬや二薺

漸覺春相泥さいふ切句

削かけ膏藥ねりの鼻にあれ

畠から頭巾よぶ也わかみつみ

二人しづかのかけ物に

なつみ哉扇二ツをとぶこてふ

百人の雲搔しほし薺ほり

万葉しうにも、朱雀の柳さ侍り、

所がらのけしきを

たひらこは西の禿に習ひけん

とばしりも顔に匂へる薺哉

七種や明ぬに聾の枕もと

夜光る梅のつぼみや貝の玉

仙石壹岐守ごの、正月五日に身

まかり給ひぬ。玉美公に御悔申

上侍るこて、

外様迄手向の梅を拜みけり

元祿十四年二月廿五日。聖廟八

百齡御年忌。於龜戸御社。詩歌

連誹令興行一座。

梅松やあがむる數も八百所

氷肌玉骨さかや

昔見し花にも香にも梅の皮

久松蕭山亭にて

梅寒く愛宕の星の匂かな

百八のかねて迷や闇のんめ

芭蕉庵をさひて

來ませるの申繼とや見えつらん

十一日

お汗粉を還城樂のたもと哉

景清が世帯みせぬや二薺

漸覺春相泥さいふ切句

削かけ膏藥ねりの鼻にあれ

畠から頭巾よぶ也わかみつみ

二人しづかのかけ物に

なつみ哉扇二ツをとぶこてふ

百人の雲搔しほし薺ほり

万葉しうにも、朱雀の柳さ侍り、

所がらのけしきを

たひらこは西の禿に習ひけん

とばしりも顔に匂へる薺哉

七種や明ぬに聾の枕もと

長嘯の記に、淺草の觀音さて、

國ゆすりてもてなす佛をはず。

口にまかせて、

いかなれや野邊に刈かふあさ

くさのくはんをむまのはみの

こしつる

其時をおもひて、

土手の馬くはんを無下に菜つみ哉

正月巳巳、布施の辨才天へ詣侍

る奉納

玉椿晝とみえてや布施籠

梅津硯水會に

窓をやれと梅ほころびぬ大家中

正月廿一日冠里公に侍座

菜刻みの上手を握る蕨かな

接木を晝て



な、艸や跡にうかる、朝鳥  
砂植の水菜も來たり初わかな

溪邊双白鷺

沐ふ鷺芹梳る流かな

うすら氷やわづかに咲る芹の花(河州八尾 娶そしり)

一升はからき海より蜆哉

石一ツ清き渚やむき蜆

白魚や海苔は下邊の買合せ

行水や何にとままるのりの味

白魚や漁翁が齒にはあひながら

白うをの鬻にあがるひばり哉

陽炎や小磯の砂に吹たてず

したしき友に

こなたにも女房もたせん水祝

衆鼠入、懷の夢をひらきて

引つれて松をくはゆる鼠かな  
寶引に蝸牛の角をたくく也  
帶せぬぞ神代ならまし踏哥宴

難波人、福の神を祈りて、七人  
が句を奉る中に、大黒殿をいさ  
め申せさて、樽ひさつ送られた  
り。

年神に樽の口ぬく小槌かな

三月三當三十日

山吹も柳の糸のはらみ哉

臯にあはぬ目鏡や臘月(畫成)

種かしや太神宮へ一つかみ

舞鶴や天氣定めて種下し

格枝、繪馬合に

ことし斯螽ふえたり稻荷山

禁固ヲ破リテ暇ヲ玉ハル也

破や見憎い銀を父のため

やぶ入やそれはいなばの是は星(待しき かげ)

故赤穂城主、淺野少府監長矩奮

臣、大石内藏之助等四十六人、

同志異體、報亡君之讐、今茲二

月四日

官裁下令ニ時伏シ又齋ヲ展

萬世のさえずり、黄舌をひるが

へし、肺肝をつらぬく。

うぐひすに此芥子酢はなみだ哉

富森春帆、大高子葉、神崎竹平

これらが名は焦尾琴にも残り聞

えける也。

點印半面美人の字を彫て、琴形

の中ニ備へタルを、はじめて冠

里公の萬句の御卷に、押弘め侍

るさて、

春の月琴に物書はじめ哉

悼三後ノ立志、初音は女也

昔かな初音三井寺夢の春

題 水

ちくま河春行水や鮫の髓

畫 贊

拾得の鳳巾にからむや玉箒

爰にけふ御馬水かへ水間寺

奉 納

金柑や冬青にさしても稻荷山

藪入や一ツはあたるうらや算

やぶ入や牛合點して大原迄

元祿丙子のこし、む月末つかた

に淺茅がはら出山寺にあそび侍

り、島中の梅のほつえに、六分

斗なる蛙のからを見つけて、鴨



の草莖なるべしと折さり侍る。

草莖を包む葉もなき雪間哉  
蝸牛豆かとはばかり柳かな

御忌

人の世やのどかなる日の寺林

本多總州公にて

春の夜や草津の鞭のゆめばかり

淺瀬川泛舟

河上は柳かんめか百千鳥  
柳には鼓もうたず哥もなし  
欄干や柳の曲をつたふ狙

川才牛追善、一子九藏名を

ぎ侍るに、

塗顔の父はなからや雉の聲

此雨はあたゝかならん日次哉

二月十五日東京發足

西行の死出路を旅のはじめ哉  
渡し舟武士は唯のる彼岸哉

佛若シ大晦日に入滅し給はゞ、

いかに佛さも、さんちやくすべ  
き。かゝる衆生のためには、往生  
もふのものなるへし。

佛とはさくらの花に月夜哉  
山里の名もなつかしや作獨活  
初茸の盆と見えたり野老賣  
ところうり聲大原の里ひたり  
野鼠のこれをくふらんつくくし  
竹の香や柳を尋ね露のとう  
梅がゝや此一すじをふきのとう

二月十七日原驛

菜苑

黒胡麻でこゝをあへぬか土筆

春雨やひじきものには枯つゝじ

等射あいさつ

闇の夜のをりないかとは梅の袖

新三十三間堂

若艸やきのふの箭見も木綿うり

青柳に蝠蝠つたふ夕ばえや

柳上鷺の圖に

さかさまに鷺の影見る柳哉

傾城の賢なるは此柳かな

春雨

綱が立てつながら噂の雨夜哉

富士の臈都の太夫見て譽ん

おぼろとは松の黒さに月夜哉

類焼の比、邊鄙の居を問て、一樽

に玉子を送る人に

わらつとや雪の玉水十とよむ

南都にあそぶ雨

傘や薪の夜のありとをし

無事馬喧

夕日影町中に飛こてふ哉

見獅子恰有感

てふしるや獅子は獸の君也と

蝶とぶや猿をよび込原屋敷

藁屑に花を見すてしこてふ哉

釋菜

聖堂にこまぬく蝶の袂哉



百とせはねるが薬のこてふ哉

柳燕圖

乙鳥の墓をうごかす柳哉  
茶の水に塵な落しそ里燕

畫さん

燕やかろき巢を曳八巾  
階子からとふさに及ぶつばめ哉  
海面の虹をけしたるつばめ哉  
傘に埒かさうよぬれ燕  
颯やひばりあがれど夕日影  
うつくしき顔かく雉の距かな  
人うとし雉をとがむる犬の聲

角田川にて

なれも其子を尋るか雉の聲  
浮苔すゝぐ水の名にすめ都鳥

小田かへす鉄も柱やのこる雁  
爰かしこかはづ鳴江の星の數  
ちんば引蝦にそふる泪かな  
帆柱のせみよりおろす雲雀哉  
苗代や座頭は得たる畝傳ひ  
たねおろし俵に渡す小橋哉  
景政が片目をひろふ田螺かな

みの路にかゝり侍るに

孫どもの蠶やしなふ日向哉  
春雨や桑の香に酔みの尾張

活徳、岩城に逗留して、餞別の

句なきを恨むるよし、聞え侍り  
しに

松島や嶋かすむとも此序

南村千調、仙臺へかへるに

行春や猪口を雄島の忘貝  
富士の繪にのぞまれ侍り  
三帆船は鹽尻になるかすみ哉

小庭にうつしたる梅の小枝に、  
鶉の草莖を見出て、人々に句を  
すゝめけるつゝめで、

梅の香をうたてや鶉のやどりとは  
いせの雲津を過侍る夕げさふ比  
に、

馬に出る子を待門や傀儡師  
傀儡師阿波の鳴戸を小哥哉  
四睡圖

かげろふにねても動くや虎の耳  
三州小酒井村觀音奉納  
如意輪や躰もかゝず春日影

或お寺にれう比丘さて、腰のぬ  
五元集

けたるおはしけり。住持の深く  
いこそしみ申されしに、五ツの  
徳を感ず。

能睡 煖な所嗅出すねふり哉  
能忘 おもへ春七年かなた夜の雨  
能捕 鶉かと鼠の味を問てまし  
能狂 陽炎としきりに狂ふ心哉  
能耽 髭のあるめおとめづらし花心  
自得

蝶を嚙で子猫を舐る心かな  
足跡をつまこふ猫や雪の中  
猫の子のくんづほくれつ胡蝶哉  
市間喧  
つけ木屋の手なら足なら雨蛙



遠遊醉歸の駕籠の内にて

春の夜の女とは我んすめ哉(かひなく  
たゝん)

宰府参詣の舟中

菜の花の小坊主に角なかりけり  
醜に桃李の詩人髭白し  
鶏の獅子にはたらく逆毛哉

壬子曲水もよほされて

水香を烏帽子にきせん岩つゝじ  
曙やことに桃花の鶏の聲  
花さそふ桃や哥舞伎の脇踊

傳え來て雛の寶や延喜錢  
見てのみや盗まぬ雛は松浦舟  
おはしたに木兎もあり雛座敷

雛やそも暮盤にたてしまろがたけ

三月四日雪ふりけるに

ひなやその佐野のわたりの雪の袖  
段のひな清水坂を一目かな  
折菓子や井筒に成て雛のたけ  
雛のさま宮腹くしましける

永代島八幡宮奉納

汐干也たづねて參れ次郎貝  
親にらむ比目を踏ん汐干哉  
紀國の鯛釣つれて汐干かな

對 酌

もどかしや雛に對して小盞  
曲水にあの氣違は茶碗哉  
菓子盆にけし人形や桃の花

曲水や笥まかする宿ならば  
綿とりてねびまさりけり雛の顔  
くり言を雛も憐め虎が母  
雛くれぬ人を初瀬の棧敷哉

緑豆マメの頭も白し桃の眉  
順禮はよそに拜むやとり合

貝そろへを送られしに

蛤のしかもはさむか玉柳

行露公、あたまへ御浴養の比、

はなんけの句奉るべきよし仰あ  
りて、觀遊の御書ごも聞えける  
に

脇息にあの花おれと山路哉

露沾公御庭にて

寐時分に又みん月か初櫻

縁からはこなた思ふや花の庭  
地諷や花の外には松ばかり  
花見哉母につれたつ盲兒  
いざさくら小町が姉の名はしらす

黒谷にて

万日の人のちりはや遅櫻

仁和寺

いなづまのやどり木成し櫻哉

上野にて

浮助や扨從見に行櫻寺

妙鏡坊より花送れしに

文は跡に櫻さし出す使哉

花さ尋友

饅頭で人をたづねよ山櫻

一筆令啓上ひき招れて



初櫻天狗のかいた文みせん  
友猿の友きらひすな花衣

三月廿日含秀亭の山ふみに御供  
して

御近習や花のこなたにかたをなみ

門柳塵をはらふ折ふし、うぐひ  
す啼

御用よぶ丁兒かへすな花の鳥

矮屋、妻奴の膝をいる、のみな  
るに、心ま、なる酒を吞て

傀儡の鼓うつなる華見哉

石河氏宜雨公の山庄に、美景を  
あつめて、四方に四の風情をも  
てなし給へるに

二筋の道は角豆か山ざくら

護國寺にあそぶ時、馬にてむか

へられて

白雲や花に成行顔は嵯峨(表中郎、面  
上有西湖)

立君をあはれむ

ざれありく主よ下人よ花衣

京よりくだる人にこまづてして

花に遂て親達よばん都哉

寐よとすれば棒つき廻る花の山

山櫻猿を放して梢かな

花折て人の礫にあづからん

花は都物くるゝ友はなかりけり

侍座

花にこそ表書院でお月代

花に來て都は幕の盛哉

華盛子であるかるゝ夫婦哉

はな盛ふくべ踏わる人も有

世の花や五年己前の女とは

目黒松隣堂にて

浮世木を麓に咲ぬ山ざくら

遊東叡山 三句

小坊主や松にかくれて山櫻

八ツ過の山のさくらや一沈み

人は人を戀の姿やはなに鳥

芳野山ふみして

明星や櫻さだめぬ山かつら

折に殺生偷盜あり

あざ也と花に五戒の櫻哉

行露公、年々御庭の花を給りけ  
る。こましおそかりければ、

花を得ん使者の夜道に月を哉

妓子万三郎を供して

その花にあるきながらや小盃

酒のさかなに、さくら花をたし

なむ人に

下臥に漬味みせよ鹽櫻

惜花不掃地

我奴落花に朝寐ゆるしけり

雨後

さくらちる彌生五日はわすれまじ

上野清水堂にて

鐘かけてしかも盛のさくら哉

ちる花や踏皮をへだつる足の心

日輪寺の僧さ、連哥のかたはら  
に對興して

花に酒僧とも佗ん鹽肴

一食千金さかや

津國の何五兩せんさくら鯛



辛未の春上野にあそべる日、門  
主薨御のよしをふれて、世上一  
時に愁眉ひそめしかば、

其彌生その二日ぞや山ざくら  
花に鐘そこのき給へ喧嘩買

上野郷

わたり徒士見立る比の花見哉

尋花

植木屋の亭主留守也花いまだ

湖春と清水に遊びて

車にて花見を見ればや東山

花笠をきせて似合ん人は誰

酒を妻妻を妾の花見かな

此雨に花見ぬ人や家の豆(王維山水  
寸馬豆人)

永代寺池邊

池を呑犬に入あひ花の影

甫盛はじめて上京に

花ぞ濃伊勢を仕まへば裏移

大悲心院の花を見侍りて

灌頂の闇より出て櫻哉

茶もらひに此晚鐘を山櫻

折とても花の間のせがれかな

沓足袋や鐙にのこる初ざくら

明ぼの山鳥原本缺字 櫻かな

海棠の花のうつや臘月

小鳥居は葉守の神かつし山

月雪に山吹花の素顔よし

亦是より木屋一見のつじ哉

藤咲て鯉くふ日をかぞへけり

且夕のはしるはじむるつじ哉

貪欲をしめし給ふに、たまへば

有瘡人近猛煙始雖悦後憎苦の文

のころを

雁瘡のいゆる時得し御法哉

摩訶止觀に、一日之羅不能得鳥

得鳥之羅唯是一目、此文のこゝ

ろを

鳥雲にゑさし獨の行衛哉

意馬心猿の解

立馬の日は猿の華心

雜司谷にて

山里は人をあられの花見哉

わが三嘯公、侍従になりて、寶

永二年三月廿七日に京使に、た

ち給ふを祝して

藤浪や廿七人草履とり

横のは白くあ  
づ入り水のおせき  
づれもせぬ

龍樹菩薩の禪陀伽王に對して、

たそがれや藤植らるゝ扇取

秋航、庭せりせらるゝに

此くと花の名残や筇扇

同じく入相

植足に三切の供や山さくら

に侍りて

二月十二日、含秀亭の花こし

百五十餘種、うへ添給へる下庭

錦にも藤の風は憎からじ

鯉のものは山吹の瀬やしらぬ分

淺艸川追遙

白藤を酔みそにつたふ雫哉

よそに見ぬ石の五徳や藤の露

心なき御影さんはに岩つゝじ

水影や颯わたる藤の棚



芭蕉の自畫十三懷周之談

師の坊の十年しばし柳陰

夏之部

若鳥やあやなき音にも時鳥  
有明の面起すやほととぎす  
淀舟や犬もこがるゝ郭公  
夜這星鳴つるかたや子規

宮城

歴々や下馬の折ふし時鳥

河東

川むかひたが屋敷へか子規  
鶴啼や此あかつきを郭公  
曉の氷雨をさそふや郭公

百間長屋にて

時鳥人のつら見よ下水打  
子規一二の橋の夜明かな  
阮咸が三味線しばし時鳥

傾廓

時鳥あかつき傘を買せけり

亦打山

夜こそきけ穢多が太鼓  
きぬくの用意か月に時鳥  
寮坊主のまねば淋しほととぎす(廬山雨夜)

宰府奉納

ほととぎす鳥居くと越にけり

林中不賣薪

せになくや山時鳥町はづれ

さる江さいふ村にて

くらぶ山材場の日陰や時鳥

麓寺五加がおくをほととぎす

曲終人不見

曉の反吐はとなりか郭公  
時鳥われや鼠にひかれけん  
子もふまず枕もふまず時鳥

母におくれ侍りて、たのみなき

ゆめのみ見る曉

夢にくる母をかへすか郭公

根風がつまを供して、あたまへ

行きて、

馬の間妹よびかへせほととぎす

桑名にて

蛤のやかれて啼やほととぎす  
それよりして夜明鳥や郭公  
點滴を硯に奇也ほととぎす

人間の四月にふしれ郭公(白文)  
時鳥茄子も三ツの小籠哉

う月十七日、ある人の愛子にれ

だり申されて、

郭公幟そめよとすゝめけり  
月消て腰ぬけ風呂や郭公  
六阿彌陀かけて鳴らん子規

淺艸寺樹下

虫つかぬ銀杏によらん郭公  
葉に成て晝れぬ梅や郭公  
ほととぎす只有明の狐落  
時鳥人を馳走に寐ぬ夜哉  
目の上に目をかく人や子規

夢畫

砂は目にね覺を洗へ郭公



姉が崎の野夫、忠功孝心なきこ  
しめされて、祿を給はりたる事  
世にきこえ侍るを

起てきけ此時鳥市兵衛記

佛さへこの世間はくるしきにし

らでやけふは生れ出けん

麥飯や母にたかせて佛生會

風光別我苦吟身

大酒に起てもものうき給哉

越後屋にきぬさく音や衣更

一ツとろに給に成や黒木うり

卯月八日母におくれて

身にとりて衣がへうきう月哉

慈母墓

花水にうつしかへたる茂哉

上行寺

灌佛や捨子則寺の寺の兒

若葉句合に

年寒しわかばの雲の朝ぼらけ

殿つくり並でゆゝし桐の花

夕のはなぶさ

うかれめや異見に潤む夕牡丹

いにしへのならのみやこの牡丹持

河州觀心寺

楠の鎧ぬがれしぼたん哉

筑前紅を

しらぬ火の鏡にうつる牡丹哉

雨意 艶士にめで、

八專をうつゝに笑ふぼたん哉

池田の海棠子、宵柏の行狀をあ

つめて集あめるに

さゝはうし角に火ともすふかみぐさ

下洛卯月の中の一

隱岐殿のかへり見はやせ鏡山

朝叟、百里、全阿、甫盛等上京

の時三十三日の吟席也。

寶永開元奉幣使、御代參の人の

家にて

とした氣で伊せ迄誰か衣がへ

屏風に藤房卿住すつるの所

迷ひ子の三位よぶ也時鳥

長崎屋源左衛門家に紅毛來貢の

品、奇なりさして

桐の花新渡の鸚鵡不言

愛娘子

鶏啼て玉子吸蚊なはかりけり

序令初めて上京に錢

涼み迄都のそらや連と金(揚州鶴)

護國寺にあそぶ

水漬に泪こぼすや杜若

かきつばた壘へ水はこぼれても

紫の蛛もありけりかきつばた

簾まけ雨に提來る杜若

奉納

から衣御影やかけて杜若

田家

早乙女に足あらはるゝ嬉しさよ

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家

汗鍋に笠のしづくや早苗取

田家



木賀入湯のころ

しばしとや早苗より見る寺の門  
袖裏や茄よりけに白く、り  
舟哥の均しを吹や夕若葉  
卯花や蠣がら山の道のくま  
うの花やいづれの御所の加茂詣

寄<sub>二</sub>幻<sub>一</sub>吁長老

老僧の笈をかむなみだ哉  
笋よ竹よりおくに犬あらん  
竹の尻を折節聞や五月闇  
笋や丈山などの鎗の鞘(腰下無寸鐵)  
素堂居

艸の戸は皆喰ものぞ夏の艸

楓子居

夏艸や家はかくれて御用茅

夏草や橋臺見えて河通り  
目通の岡の榎や築ざかひ  
吐ぬ鶉のほむらにもゆる籜哉  
鶉につれて一里は來り岡の松  
争はぬ兎の耳やかたつぶり(晝興)

戸塚越侍るに

鯉荷の跡は己日の道者哉  
帆をおろす舟は鯉か磯かくれ  
夕鹽や客の間にあふ中ふくら

しらすか通る時

世中をしらすかこし小鯨うり  
飯鮮の鱧なつかしき都かな

和重錢に

伊勢にても松魚なるべし酒迎  
こよろぎの名は昔にてうづは哉

呈露江公錢

箒木や人馬へだつる五月雨  
さみだれや是にも外を通る人  
顔ぬぐふ田子のもすそや五月雨  
さみだれや富士の煙の其後は  
五月雨や傘につる小人形  
さみだれや酒匂でくさる初茄子  
嚴有院殿の大法事を、東叡山に  
拜み奉ル。

市驛吟

馬舟とわかる鯉やけいば組  
花あやめのぼりもかほる嵐哉

公門に入時

あやめわく明り障子のみどり哉

残湯を沼になしたる菖かな

けふもけふあやめもあやめかはら  
ぬに宿こそありしやごとおぼえぬ。  
住なれし所へだて、よめりさ、伊  
勢大輔、家のしうに見え侍る。

菖こそ蛙のつらにあやめ哉

此友や年をかくさず、白髪二毛の  
身をわすれて、松ごの、太郎ごの  
也けりさの、しれば、今の人形の  
風俗こそさらに、小兵衛なごいふ  
人形はなし。

我むかし坊主大夫や花菖

五月三日わたましせる家にて

屋根葺と並でふける菖哉

あひしれる女の塔の澤に入て、

ふみこしたるに



山笹の粽やせめて湯なぐさみ  
艸の戸やいつ迄草のかひ粽  
木つゝじ夕べをしめて菖哉

五月十三日

雨雲や竹も酔日の人あつめ  
藻の花や金魚にかゝるいよ簾

酒 満

葛の葉の酒典童子も二面

静嵐さいふ題を

海松の香に杉の嵐や初瀬山  
蝙蝠の尿も子になれあやめ草  
交代の葉守の神や初柏  
疱瘡のあととは遙に幟哉

縁槐高處

はつせみや笛に袋を十文字

かたつぶり酒の肴に這せけり  
鎌倉やむかしの角の蝸牛  
たのめてや竹に生るゝかたつぶり  
文七にふまるな庭のかたつぶり

河原町にて

妾が家ほたるに小哥告やらん

宇治にて

川くまや水に二重のほたる垣

うつせみの繪に

夏虫の碁にこがれたる命哉

谷 中

風ふかぬ森のしづくやかんこ鳥

僧正が谷

佗しらに貝ふく僧よかんこ鳥

下やみや鳩根性のふくれ聲

瓜の皮笠は重シとかさねけり

破扇の圖

維光が後架へ持し扇哉

烏飛紺のあふぎのあつさ哉

紅にうちはのふさの匂哉

せみ啼や木のぼりしたる團うり

隣から此木にくむやせみの聲

竹のせみさゝらにしぼる時も有

水うてやせみも雀もぬるゝ程

白雨や内儀たまゝ物詣に

市中白雨さいふ題

鳶の香も夕たつかたに醒し

白雨やもりをとむれば鼠の子

ゆふだちに鶯あつく鳴音哉(うぐひす  
さのみ)

夕立にひとり外みる女かな

露江公、溜池の高閣にはじめて  
涼を挽き、當座さおせありけ  
れば

夏山に我は御簾とる女哉

蓮生は哥はよまぬを虫拂(宇都宮入道)

樟腦に代をゆづりはの鎧かな

よめりせし時の枕か土用ぼし

捨人や木艸にかけて土用ぼし

浴衣着て瓜買に行袖も哉

狙 公 溜池にて

瓜むいて猿にくはするあつさ哉

水飯にかはかぬ瓜のしづく哉

干瓜やうつむけてほす蟹小舟

瓜の皮水もくもでに流れけり

龜毛に錢



牛島三邊の神前にて、雨乞する  
ものにかはりて

夕立や田を見めぐりの神ならば

翌日雨ふる

舟中吟

さゝがにの筑波鳴出て里急ぎ  
西行と武藏坊には清水哉  
芋のはに命をつゝむし水哉  
にんにくの跡が清水の心かな

土田のいりさいふ日の吟也

帚木に茄子たづぬる夕哉

烏山へおもむく人に

青柳やつかむ程ある蚊の聲に  
夕がほや白き鶏垣根より

鳴焼は夕べをしらぬ世界哉  
麻村や家をへだつる水車

或人の従者參宮しけるに、はな  
むけすさて

夏の夜を吉次が冠者に恨哉  
夏の夜は寝ぬに疝氣の起けり

生死去來

烏行蚊はいづくより暮の聲

捕虎東坡

七ツ毛の蚊にくるしむや足疾鬼  
蚊柱にゆめのちき橋かゝる也  
蚊をやくや囊似が閨の私語  
かやり火や蚊屋つる方に老獨

更閑

石灯籠蚊屋に消行鵜舟哉

いきげさにすでんごうさ、うち  
はなされたるが、さめて後

切れたる夢は誠か蚤の跡

旅店

富士の雪蠅は酒屋に残りけり

ある人、大なるふくべを二に引割  
て蓋とし、外は地さびのまゝ、内  
は朱に塗て、わに口にむら衝をか  
ゝせて、句をのぞむ。

清水影李白が面にかぶりけり

形、目鼻なきめんやう也

淺草河歲々吟涼

此人數舟なればこそすゞみ哉  
川涼み顔に泥ぬる詠かな  
涼みつむ安房や上總に舟はなし

すゞしさや帆に船頭のちらし髪  
舟暑し覗かれのぞく闇の顔  
千人が手を欄干や橋すゞみ  
涼しさや先武藏野の流星

韓退之捨酒吟あり

酒ほかす舟をうらやむ涼み哉

こまかた

此碑では江を哀まぬ螢哉

牛御前

是や皆雨を聞入下すゞみ

橋上休老さいふ題に

牛泥む老の齒がみや橋すゞみ  
舷を玉子でたゞくすゞみ哉  
海を見て涼む角あり鬼瓦

饒久松肅山



筆をさす御笠やかろき下涼  
人の子をめで、

涼しいか寝てつむり剃ゆめ心

畫 讚

大虚涼し布袋の指のゆく所

日枝にむかひ給ふ御神を

十八の明神つねにすゞみ哉

河原にて

曉を牛さえすゞみ車かな

此松にかへす風あり庭すゞみ

勘當の月夜に成し涼み哉(遊子殘月)

暑字 行露公にて

むら雨の木賊に通る暑さ哉

呈 饒 露江公

供がたの鞘の暑さや岡の松

人に又暑い顔あり端涼み

自 棄

たが爲に朝起晝寝夕すゞみ

五月十日雷雨、永代島の茶店に

やどりして

明石より神鳴晴て鮎の蓋

住吉にて西鶴が矢數誹諧せし時

に、後見たのみければ

驢の歩み二万句の蠅あふぎけり

七十餘の老醫みまかりて、弟子ど

もこぞりてなくまゝ、予に追善の

句を乞ける。その老醫のいまだか

りける時、さらに見られる人にも

あらず、哀にもおもひよらずして、

古來稀なる年にこそなごいへん、

さかくゆるさざりければ

六尺も力おとしや五月雨  
村田忠庵が事也

年々の春秋、武江の寺社に廻り給  
ふなる靈佛靈神、君を守りのあこ  
しめて、興廢の御威現あらたなる  
中にも、當時の開帳はさかの御て  
らさ札をうたれて、官駕、鄙馬の  
さかひに暑をなやます蠶亂、虫氣  
のさはりもなく、蟻のごさくさま  
ふてつだふ。行程の遠近を辻番に  
たづねて、

まはらば廻れ振舞水の下向道

祐天和尙に申す

夕顔にあはれをかけよ賣名號

晝顔に米搗涼む哀也

夕顔や一白のこす花の宿

逐歐陽公賦

蠅の子の兄に舜なき憎さ哉

畫 讚

蠶螂の小野とはいはじ車百合

子の肩とみつわくむ也夏旱(市中勞)

魚市涼宵

楊貴妃の夜は活たる鯉かな

七月七日靈夢を感じて、東湖の

辨才天に詣侍るに

出ぬ茶屋に欺かれても蓮哉

荷切や下手にしあれば莖を角

故翁の句を繪にかゝせて、讚のぞ

むあり。その繪は夕顔の花を書た

り。句さたがひ侍るゆへ自句を書

侍る